

375.9
Na:11
資料室

育教等中
史洋東編新

士博學文
著郎四久山中

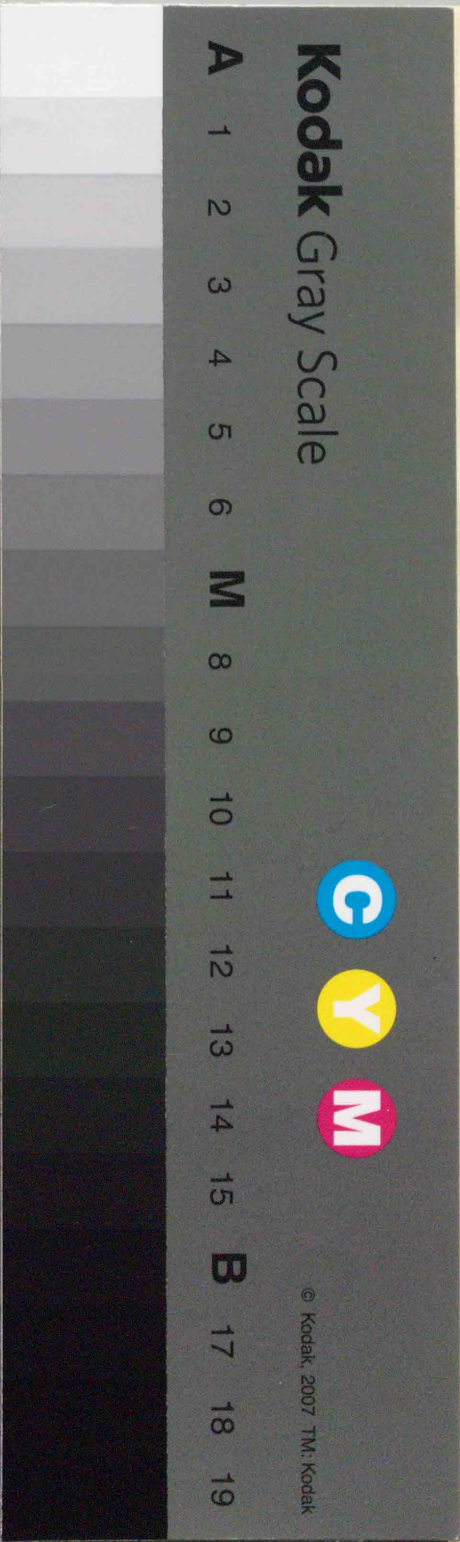
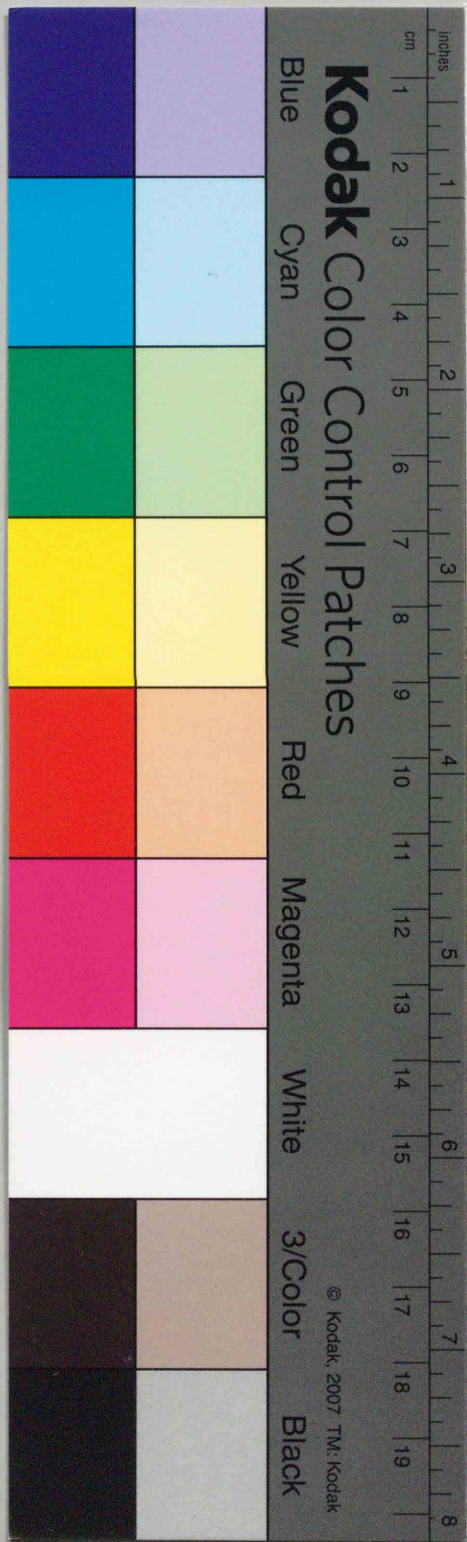
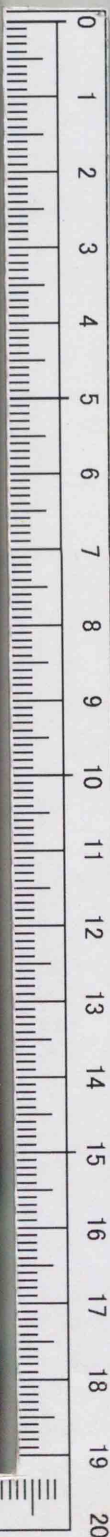
(用校學中)



據準目要授教新

版大 堂 省 三 京東

教科
41
200



42987

教科書文庫

4
220
41-1939
2000 63596



資料室
日六十月一十年四十和昭
濟定檢省部文
用科史歷校學中

育教等中

教科書文庫
4
220
41-1939
2000063596

新編東洋史

(用校學中)

授教學大科理文京東
士博學文

著郎四久山中

據準目要授教新

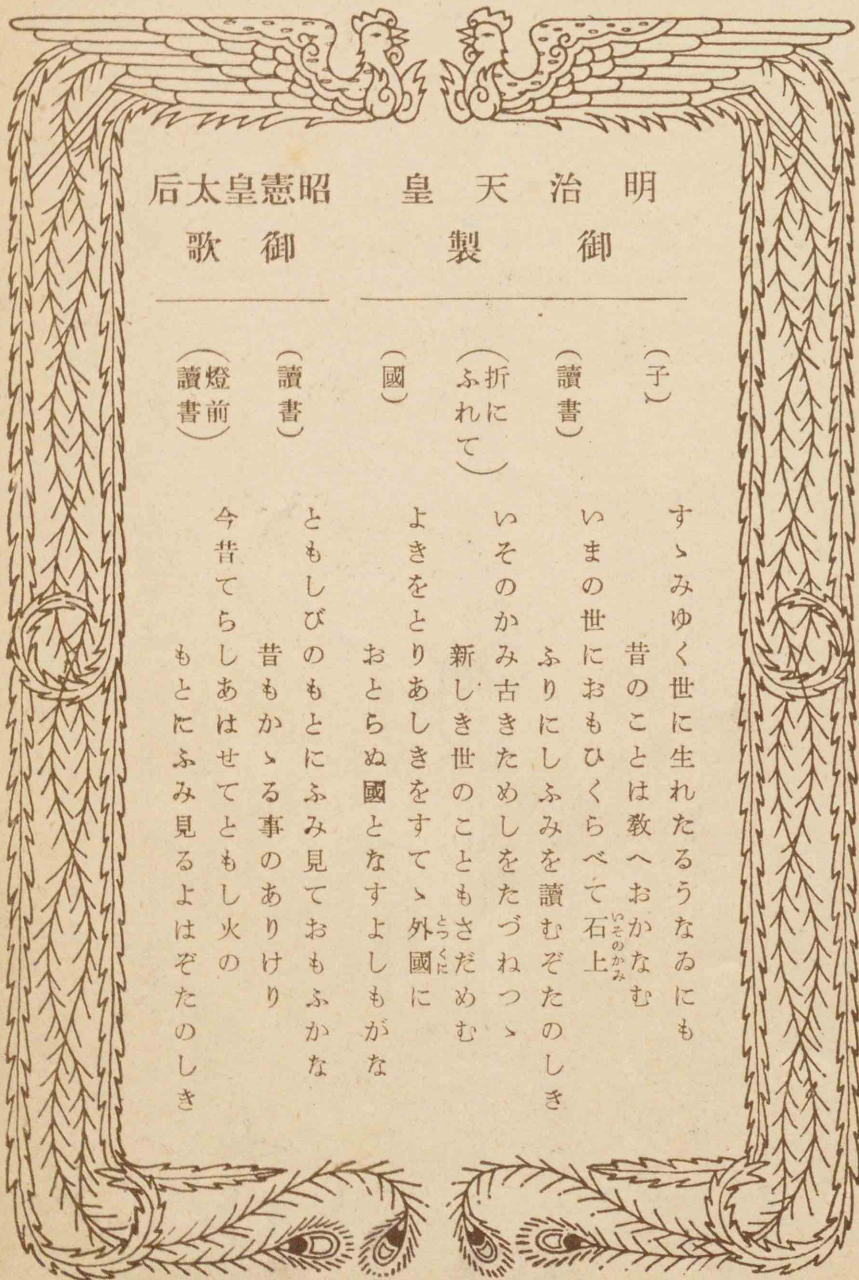


広島大学
教
63596
書

広島大学図書
2000063596


版大 堂 省 三 京東

375.9
No.11



明 治 天 皇 昭 憲 皇 后
御 製 御 歌

(子)

(讀書)

(折れて)

(國)

(讀書)

(燈前
讀書)

すゝみゆく世に生れたるうなるにも

昔のことは教へおかなむ

いまの世におもひくらべて石上いそのかみ

ふりにしふみを讀むぞたのしき

いそのかみ古きためしをたづねつゝ

新しき世のこともさだめむ

よきをとりあしきをすてゝ外國とくにに

おとらぬ國となすよしもがな

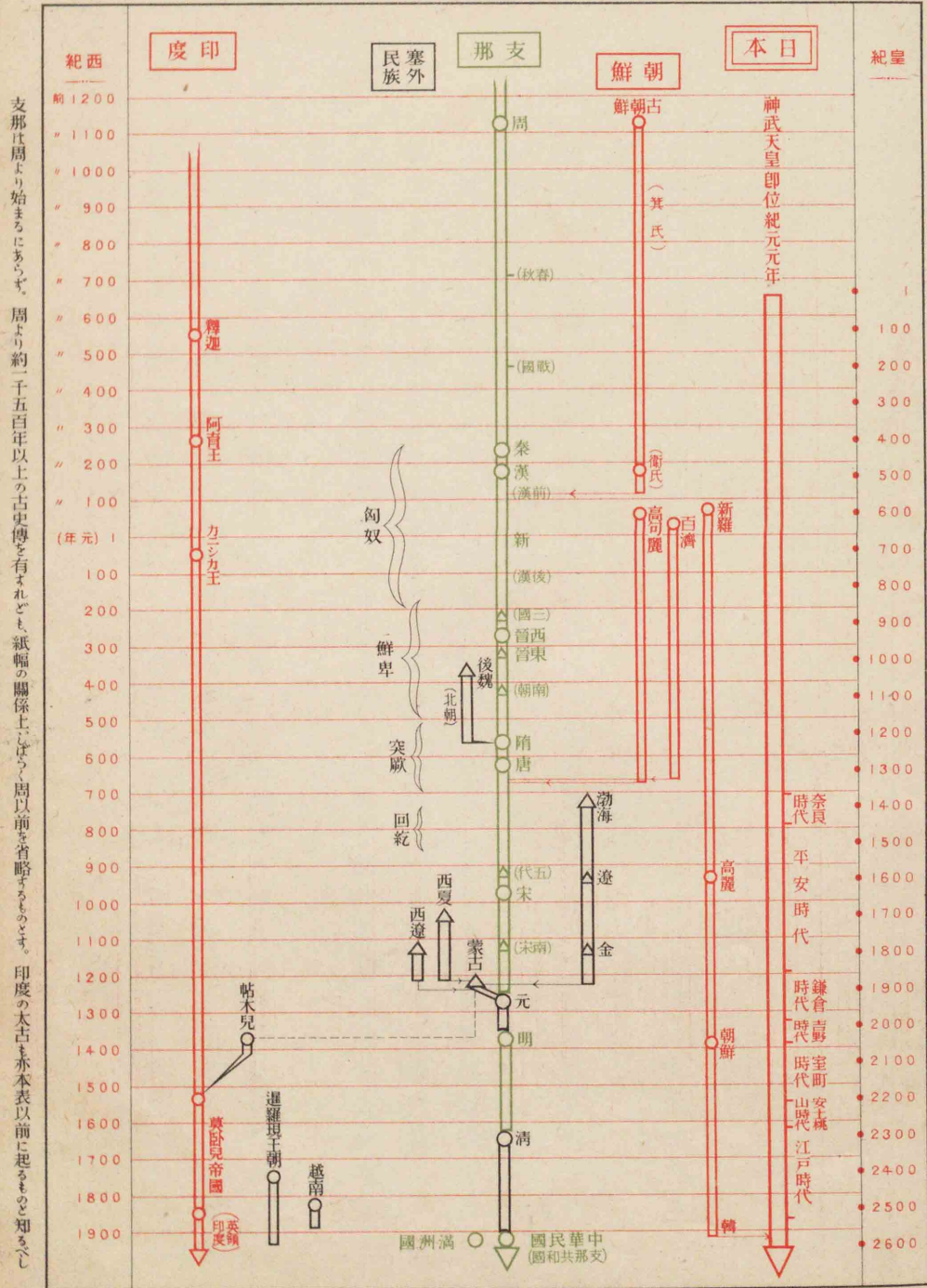
ともしびのもとにふみ見ておもふかな

昔もかゝる事のありけり

今昔てらしあはせてともし火の

もとにふみ見るよはぞたのしき

東洋史諸國總覽略表



支那は周より始まるにあらず。周より約一千五百年以上の古史傳を有すれども、紙幅の關係上しほく周以前を省略するものとす。印度の太古も亦本表以前に起るものと知るべし。

例言

- 一、本書は、中學校に於ける外國史（東洋史）の教科書として著述したものである。
- 二、本書各章の目次は、昭和十二年三月二十七日改正公布の文部省所定の中學校歴史要目に準據したるものである。
- 三、本書の記事は、簡明を主とし、事實の連絡に注意し、趣味ある逸話・傳説及び詩歌等を附録し、欄外には簡單なる小題目を掲げ、且つ本文中に正確有益にして趣味ある多數の圖畫を加へ、専ら讀者の瞭解を助け、感興と趣味とを増やしむることに努めた。
- 四、本書の紀年は、皇紀と西紀とを併せ記し、以て國史と西洋史との年代的關係を保たしめるやうにした。又重要なる紀年には、我が歷朝の御諡又は將軍・執權等の名を併せ記した。但し明治以後に起りたる事實には、便宜上明治

大正及び昭和の年敷を記した。
 五、 卷末には、歴代地圖を載せ、又諸章の間には諸王朝の系圖を記入した。適宜にこれを利用せられんことを切望する。
 六、 以上の諸點は著者の聊か注意した所であるが、なほ本書史料の選擇配列及び文辭、その他の點については、缺點あるを免れまいと思ふ。幸に大方諸賢の示教によりて訂正改善することが出来たらば、ひとり著者の幸のみでないと思ふ。

皇紀二千五百九十七年

昭和十二年五月五日 「空は青空」 「風も緑の」 吉日

中山久四郎謹みて識す

目次

第一章	東洋史の意義……………	一
第二章	上代の支那及び印度……………	三
第三章	秦漢時代……………	七
第四章	三國兩晉南北朝時代……………	元
第五章	隋唐時代……………	三
第六章	五代宋時代 渤海の興亡……………	四
第七章	元時代……………	五
第八章	明時代……………	六
第九章	清時代……………	七
第十章	歐米諸國のアジャ経略……………	八
第十一章	中華民國……………	九

第十二章 滿洲帝國…………… 壹

第十三章 現代の東洋…………… 七

第十四章 東洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟…………… 三

〔歷代地圖〕

第一圖

- 亞細亞地勢略圖
- 周代以前要地圖
- 春秋時代要圖
- 戰國時代略圖
- 古朝鮮略圖
- 印度古代佛教靈場並に亞歷山大王遠征行路略圖

第二圖

- 漢代亞細亞圖
- 漢・楚分爭圖
- 三國鼎立圖

第三圖

- 唐代亞細亞圖
- 北宋・遼・西夏對立圖

●南宋・金・西夏對立時代圖

第四圖

●元代亞細亞圖

●元代版圖擴張圖

第五圖

●明代亞細亞圖

●清初亞細亞圖

●清初滿洲圖

第六圖

●現代亞細亞圖

●露國中央亞細亞侵略圖

●露國極東侵略圖

●佛國印度支那侵略圖

目次終

中等教育新編東洋史

第一章 東洋史の意義

●東洋史 我等はこれより我が國の文化に大きな關係をもつ人物や文化や、いろ／＼の事實をのべる東洋史を學ぶのである。東洋史とは、西洋史と相ならんで、世界史の半をなす一般史である。支那印度など東洋史上の諸國は、我が國と同じく廣い意義の東洋にあつて、漢民族印度民族などがそこに現れて、幾多の國を立て、いろいろの事業をなし、さまざまの文化を造つて、世界の進展に貢獻し、また昔より我が國と文化上政治上の關係が多いのみでなく、現代國際上の關係も、また極めて深く、その諸國の沿革と文化の由來や性質を知

ることは、我が國民にとつて甚だ大切であり、また國史を明らかにする
ためにも、大いに有益な参考となるものである。

● 國體の相異 さて既に國史を學んだものが、今より外國史を學ぶ
ことになつたのにつけて、特に先づ注意すべきことがある。それは
我が日本と外國との國體の大きな相異の點である。

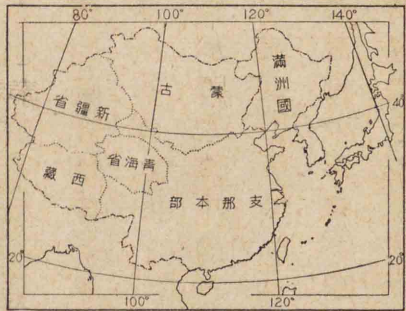
我が國はいふまでもなく、開闢以來君臣の分が一定し、萬世一系の天
皇を奉戴する正大尊嚴な國體の國である。しかるに、支那その他の
諸外國には、昔よりしばしば主權者の革命が起り、その國號もたびた
びかはつて來た。

我が國と諸外國とは、かやうに國體に根本的の大相異のあることは、
外國史を學ぶにつけて、第一に知つておくべきことである。

● 歴史の意味 歴史は、まづ演劇のやうなものである。その國土は
舞臺で、その土地に興亡していろく事業をなしたる民族は、役者

正大尊嚴なる日
本國體と内外自
他の比較考察

人と時と處
因果と影響



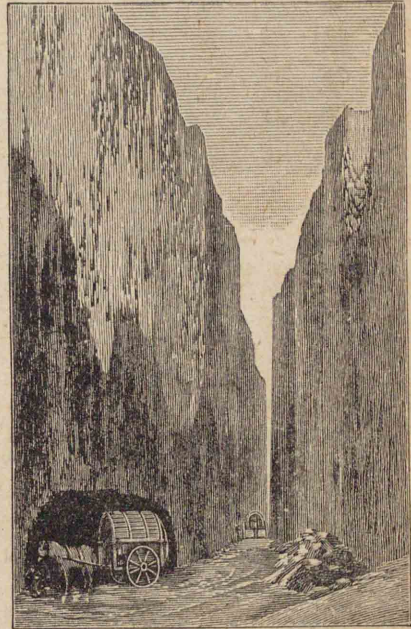
支那略圖

にたとへることが出来る。
又歴史の意義を極めて簡單にいへば、何時誰
が何處で何事をなしたかといふことを明ら
かにするもので、即ち人と時と處の三ツが大切
である。やゝ精しくいふと、その出來事の原
因結果及び影響などを明らかにしなければ
なるまいと思ふ。

第二章 上代の支那及び印度

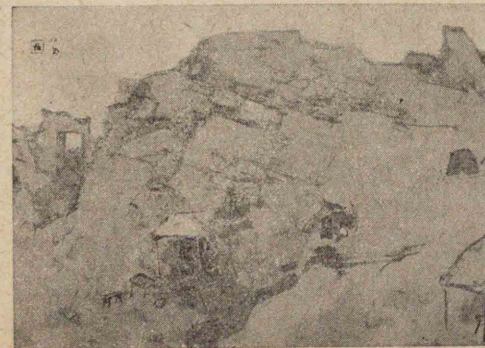
第一節 上代の支那

● 支那の黎明 さて支那の歴史の舞臺は、後には甚だ廣くなつたが、
初めは北支那の黄河の流域の一部分であつた。またその役者は、か



(真寫)し通り切の土黄省西山

なり多かつたが、その主人役ともいふべきものは、漢民族である。この漢民族は今より約五千年前に、黄河の沿岸に住み、初めは穴居野居



(畫實寫鳳栖内竹)狀の居穴河黄ぶのしを那支の古上

蠻の原始的な生活状態であつたが、古傳説によれば、黄帝といふ君主が出て大體これを統一し、始めて舟車を作り、音楽を定め、文字を製し、また養蠶を始めたと傳へられてゐる。その後堯・舜の二帝相ついで出で、よく天下を治め、聖天子として後の人に尊ばれた。

黄 帝
諸文化の起り初
め
堯・舜二帝

二十四孝の第一

禹の治水

* 皇紀前一〇〇〇頃、西紀前一七六〇頃
革命の始
夏・殷・周三代の代がはり



(刻石の代時漢後)像の堯帝

帝堯放勳、其仁は天の如く、其知は神の如く之に就けば日の如く、之を望めば雲の如し。

功し、帝舜について、天子となり、國を夏と號した。禹王の子啓、父について王となり、王位の世襲がこゝに始つた。その後桀王に至り、惡政を行つたので殷の湯王に滅された。殷の世 湯王より六百年ばかりたつて、紂王といふ惡王が出たため



王 禹

特に帝舜は孝行の人で、支那の二十四孝の第一として名高い。支那は昔から孝行の徳を重んじ、孝は百行の本といはれてゐるほどである。

夏の世 堯舜の世に、黄河の洪水があつて、帝舜の賢臣禹は治水に成

* 皇紀前四六〇頃
西紀前一二〇〇頃

日・支國體の相
異
革命の支那にも
この二義人

周公の輔佐



周成王を輔くする

に、周の武王に滅された。その末路は、前代に似てゐる。かくて支那

は上代より王朝の革命があつて、それが萬世一系の尊嚴なる我が國體と大いに異なる所である。

殷周革命の際、夷・叔・齊の二義人あり。武王出陣の時、武王の勢に屈せず、臣として君を伐つゝの暴舉を諫めたが、きかれず、天下既に周の世となるや、周に仕へることを恥ぢて、山に入り、藪をとり、終に餓死したといひ、その清節は永く後世に傳はつた。

④ 周の盛衰 周の武王の父文王は、殷の末の大諸侯で、仁政を行ひ人望があつた。武王は殷に代つた後、今の長安(陝西)の西に都した。

武王の死後、その弟周公は幼主成王(武王の子)をたすけて善政を行ひ、天下よく治り、文化も次第に進歩した。成王の後、數世を経て王威漸く衰へ、第十二世

周の東遷
* 皇紀前一〇〇、
西紀前七七〇

春秋の世

尊王攘夷
攘夷—えびすを
はらひのけるこ
と

五霸の第一

道德と經濟
(修身とそろば
ん)との調和

の幽王は、犬戎といふ異族に攻め殺され、その子平王はこれを恐れて、東の方洛邑(河南)に遷つた。これを周の東遷といひ、東遷の前後によつて、周を西周・東周の二つに分ける。

⑤ 春秋五霸

周の東遷の後、約三百年間を春秋の世といふ。この間、



管仲

王室は益衰へ、諸侯は互に相争ひ、外部より夷狄とよばれる異民族が益侵入した。よつて諸侯の強きものは、尊王攘夷を名とし、王命をかりて他の諸侯に號令した。これを覇者といひ、五人の覇者があらはれた。その中、齊の桓公が最も名高く、名臣管仲を用ひて覇業に成功した。桓公の時は、我が神武天皇即位紀元前後の頃である。

管仲は春秋時代第一の政治家で、よく富と教又は經濟と道德との關係に注意して、

「倉廩(サウリシ)倉庫(ク)實(ミ)ちて禮節(レイセツ)を知り、衣食(イシヨク)足りて榮辱(エイジヨク)を知る。」といふ政策(セイサク)を守つて居た。

● 戦國七雄 春秋の後、二百年ばかりの間を戦國の世といふ。この間、春秋時代の諸侯の數は減少して、秦楚齊燕韓魏趙の七大國等となり、七國の君は自ら王と稱して、周王はいよゝゝ尊嚴(ソンエン)を失ひ、七國が互に競争すること恰(アツカ)も我が戰國時代のやうであつた。中でも西方の秦は最も強く、東方の六國を壓(オス)しようとする勢があつた。そこで六國同盟の策(サク)がたてられたが、秦も亦努力して六國の連合を破り、且遠交近攻(エンカウキンコウ)の策を立てて、次第に六國を弱め、遂に周を滅し、秦

戰國時代

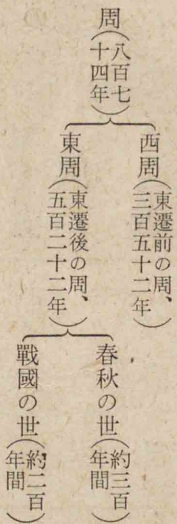
遠交近攻の策
* 皇紀四二二、
靈天皇御代、
紀前二四九
西 孝



古代支那戰士の圖
(後漢時代彫刻の山東省武梁石室圖像)

秦の武力統一

王政(セイ)に至り、次第に東方の列國を滅して、つひに天下を統一した。かくて周は三十八世、八百七十四年にして全く亡んだ。周一代八百餘年は、支那の歴代中最も長いものであつたが、それは果して完全の統一であつたかどうか。



第二節 周代の文化

周代の制度、その他の文化は大いにとゞのひ、多く後世に傳はり、その影響も甚だ大きい。よつて特に一節をたてて之をのべよう。

● 封建 周代の政治は、封建政治であつて、周王は天下の君として最も尊く、土地を諸侯に分け與へて、おのゝその領地を治めさせ、それ

周王の尊

五爵の諸侯
六官の制

田租と力役、布
縷の貢獻

天子・皇后と農
蠶の業

父母兄弟子の五
教

ぞれ公侯伯子男の五爵を授けた。

①官制 中央政府には六官を設け、天官は政務を總理し、地官は民治教育を掌り、春官は祭祀禮儀を掌り、夏官は軍事を掌り、秋官は刑法を掌り、冬官は工藝を掌つた。

②田制 支那は昔から農業や養蠶を重んじて田地の收穫を田租とし、その外に力役の征(人民を土木、布縷の征(布縷を貢せ))があつた。男子は主として耕作に、女子は主として養蠶と織物につとめ、天子、皇后も親耕親蠶の儀式を行ひ、みづから農蠶にはたらいて、國民を奨励した。



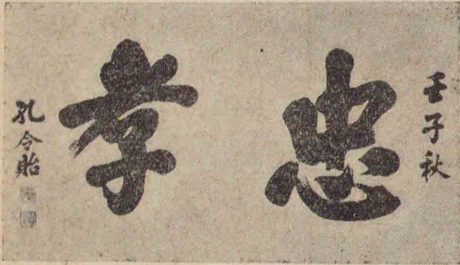
(漢代石刻の農夫、桑をむつる農婦、左に鋤を、右に紡ぎを、つもる。

④教育學術 支那の教育の始めは堯舜の頃にあつて、帝舜は、父は義、母は慈、兄は友、弟は恭、子は孝といふ五教を明らかにして、國

學術の根と芽と
花

* 皇紀一〇九、綏
靖天皇御代、西
紀前五五二
孔子の學徳・趣
味及び意志

儒教
正しい政治即ち
道徳による政治



孔子七十代孫孔令貽筆

民に教へ、夏殷周の三代には各學校の制度があつた。かくて支那古代の學術は、堯舜の頃にその根をうゑ、夏殷の世に芽を出し、周に至つては花を開いて美を競ふといふべきで、春秋戰國の世は亂世であつたけれども、また一方には道を説いて、天下を平和ならしめようとするものもあらはれ、また列國ともに人材を招いたので、學者論客競ひ起り、互に世を救ひ身を立てんことを力めた。その中最も名高きは聖人孔子である。

⑤孔子 孔子は春秋時代の末、魯(周公の封國、山東省の内)に生れ、學徳の高いのと共に、音樂の趣味も人に優り、その意志極めて強く、義を見てなさざるは、勇なきなり。といつた。儒教は孔子の大成した道徳教で、政は正なりと説き、仁を以て修身治國の本とし、仁の最上徳に達するには家庭の孝悌の道より始むべし

孟子

論語の傳來

と教へた。その後戰國の世に孟子アウシが出て、孔子の道を弘ヒロめ、儒教を孔孟の道といふやうになつた。

孔子の師弟及び孔子と時の人との問答などを輯アツめた論語は、我が應神天皇の時、百濟ハクセの王仁ニがこれを本邦に傳へた。これは國史で學んだとほりである（孔子の歿後約七百六十年）。

日のもとに仰げど高しから國の

おほき聖人の道の光は

清水濱臣

孔子七十七代孫孔德成（孔家現代當主）眞筆

道德光華五千字

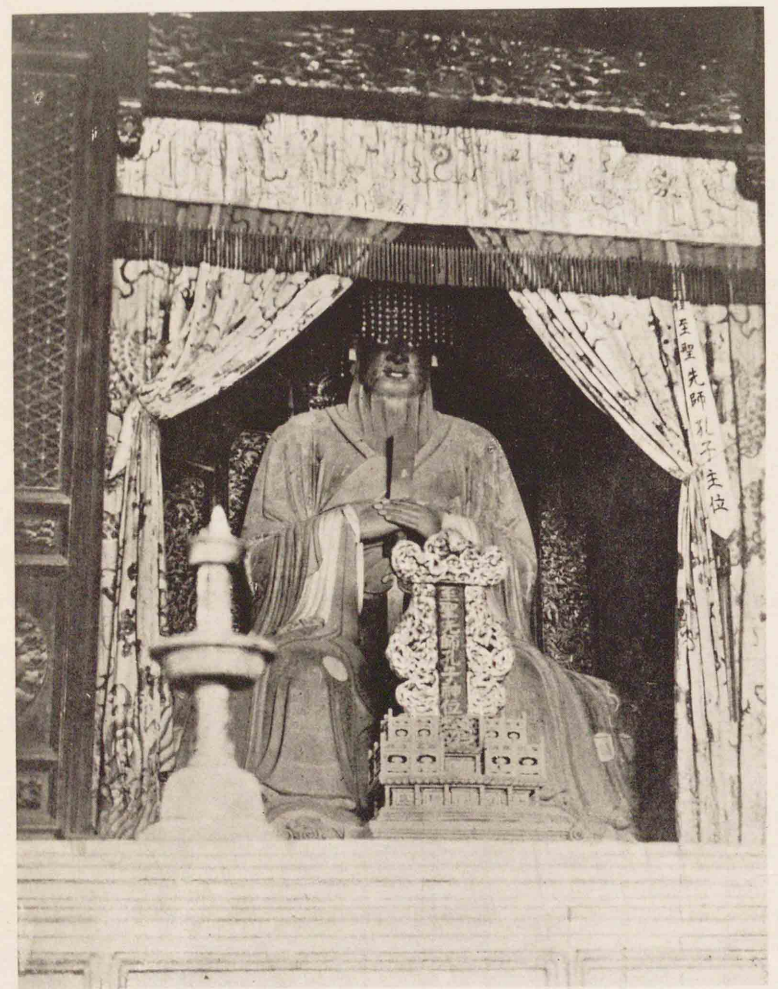
聖賢根本十三經

闕里孔德成十一歲書

孟母三遷の教

孟子の母は有名な賢母であつた。

その家初め墓地に近く、孟子は遊戲にも葬式のまねをしたため、母は善き住處ならずとして、商家の傍に移り、更に學校の傍に遷ウツつた。これを孟母三遷の教といふ。又孟子の少時、讀書中母は機織ハタオリをしてゐたが、孟子の讀書を中止するや、母は刀を以



孔子の像

孔子の像

この像は山東省曲阜縣城内にある大成殿(孔子を祭る殿堂)に安置されてあるもので、東魏の興和年中(今より大約一千四百年前)に作つたものとして傳へられてゐる。

てその織物を断ちきつて、學問の中止すべからざるを諭したといひ傳へ、世に之を孟母断機の教といふ。



(刻石の代漢)圖ふ乞を教に子老子孔

孟子の著した書物を孟子といひ、論語及び大學中庸と併せて、之を四書といひ、儒教の大切な古典にして、我が國に於ても昔からよく行はれ、大いに國民道德の發達に役立つた。

諸子百家 儒教の孔・孟二子が道德や禮樂を重んずるのに對して、老子や莊子は、反動的に自然無爲の道を説いた。

この一派を道家といひ、儒教と共に世に行はれ、後世の道教は、この派の説によつてつくり出されたのである。その他、いろいろの學派がならび起り、これ等を總稱して諸子百家といふ。

四書と我が國民道德

孔・孟と老・莊

道家より道教

諸子百家

古典の花

⑦ 支那の古典 かくて支那の學術は、周代になつて百花のさき競ふやうに盛に起り、後世の學者は之を標準とし、哲人は道をこゝに求め、文士は材をこゝに取り、支那の學術を知らうと志すものは、先づ周代の古典を學ぶことを第一とするやうになつた。

此處まで 17-18

第三節 上代の印度

● 古代印度 亞細亞大陸の南方に突出する一大半島の印度は、支那とともに世界の舊國の一で、又東洋文化の一發源地である。今より四千餘年前にアーリヤ人種一派は、中央亞細亞から南に下つて印度に入り、やがてその國民は、僧族、王族、平民、奴隸の四種姓に分れた。當時の宗教はブラーマン教といひ、種姓の階級を立て、僧族の特權を認めたから、僧族はつひに專横を極め、他の三階級はその壓制に苦しみ、世を救ふ聖人が出て宗教を革新することを希望した。

印度の四種姓

衆生の希望



釋迦 圖

(藏寺福東都京) (筆玄道吳の唐傳)

釋迦圖

支那の唐の世、文物大に興り、圖畫の術も頗る發展した。吳道玄は唐の諸大家の一人で、字は道子といひ、吳道子の名によつて知られてゐる。玄宗時代の人。人物畫に長じ、佛寺等の壁畫を作つたので名高い。本圖は、京都東福寺に藏められ、吳道玄の筆と傳へられてゐる。

世界大聖の一

* 皇紀九七頃、綏靖天皇御代、西紀前五六四頃

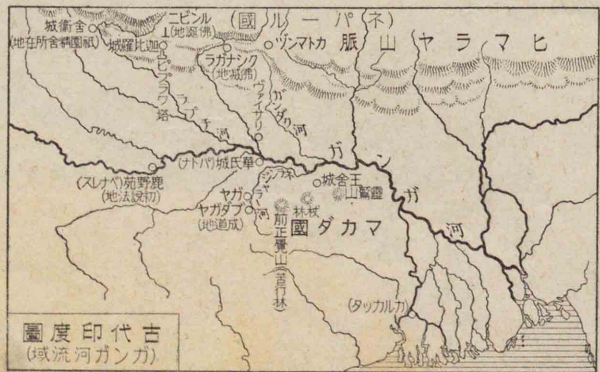
出家の釋迦
入山の釋迦
出山の釋迦

大決心

光と闇との分る所

釋迦牟尼佛

この時、世界大聖の一人である釋迦が生れた。釋迦は本姓名を喬答摩・悉達といひ、もと中印度迦毘羅(今のネパル地方)城主の王子である。深く社會の腐敗と人生の無常とに感じて、衆生・濟度の念を起し、つひに王宮を出て山に入り、難行苦學すること六年、さらに山を出て、中印度の摩揭陀國に行き、今の佛陀迦耶に於て、菩提樹下の金剛座に靜坐して念を凝らし、若し正覺即ち正しい悟りを得ねば、誓つてこの座を去らずと決心した。あゝ釋迦は正覺を得るか得ざるか。これ即ち善と惡との戦ふ所、正と邪との争ふ所、光と闇との分るゝ所である。釋迦は正大なる精神上の力をもつて、一切煩惱の惡魔を撃退し、二月八日旭日の光彩のほのめく



成道又は成佛

一切平等
正道成佛



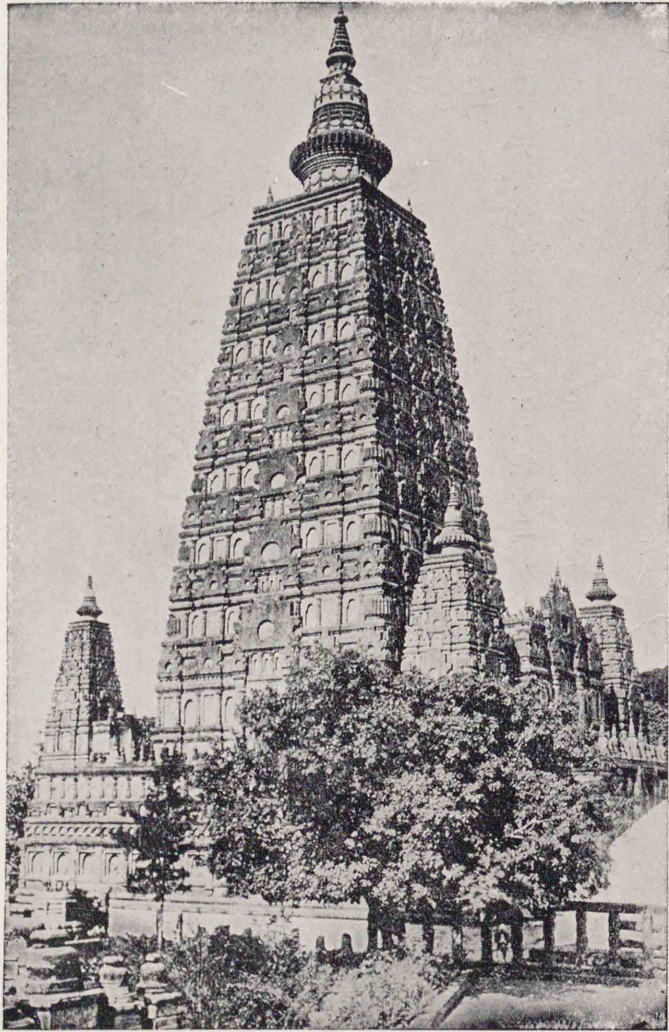
頃、つひに正覺を得て佛陀（單に佛ともいふ、眞）となられた。之を成道（ジャウダウ）といひ、その教を佛敎といふのである。

釋尊成道圖

印度ボンベイの東北約三百五十哩のアジヤンタ(Ajanta)に洞窟の精舎がある。西紀前第一世紀頃より紀元後第七八世紀に至るまでの築造であるといふ。本圖はその一洞窟の壁畫で釋尊がその成道を妨げんとする種々の惡魔を降して、つひに大悟成道せんとする狀即ち釋尊降魔の狀を畫いたものである。

釋尊の説敎と佛敎の弘通 釋迦は成道

の後、四十餘年諸國を巡つて説敎し、一切平等（ジャウダウ）を唱へ、種姓の差別なく、正道（シャウダウ）を行へば、皆成佛（ジャウブツ）することを得べしと説いた故、これまで僧族の壓制に苦しめられた諸種姓は、喜んで佛敎に歸依（キエ）した。



釋尊大悟成佛の靈場の高塔

釋尊大悟成佛の靈場

この靈場は、今の印度のベンガル州のガヤ市の南方三里許の佛陀迦耶(Buddha-Gaya)にある。釋尊の靈場は印度に多いが、第一はこれである。釋尊は此靈場の菩提樹下の金剛座に端坐し、沈思默念の末、廓然として大悟し、佛陀となられた。圖中の高塔は此古蹟に建立したもので、其起源は遠く二千一百餘年前の阿育王(アユカ)釋尊死後二百年許の時にあるが、近世緬甸王及び英國人はこれを修復再興した。高さ百七十尺許、基址の一邊五十尺許である。
釋尊大悟の時は、其年三十五歳の二月八日、四月八日は釋尊の誕生日であると傳へられて居る。

二大聖人殆ど同時代
釋迦も人なり我も人なり
阿育王の熱心

釋迦の歿したのは、皇紀一七七年頃(西紀前四八四年頃)で、孔子の歿した年より僅かに五年前頃であるから、釋迦と孔子とは、殆ど同時の二大聖人であった。
釋迦もまたあみだももとは人ぞかし我もかたちは人にあらずや
一休和尚
その後、二百餘年を経て、中印度のマガダ國(Magadha)に阿育王(アユカ)が出て、深く佛教を信じ、その傳播に熱心であったので、佛教は盛に行はれ、印度より外の諸國にも弘まるやうになつた。

第三章 秦・漢時代

第一節 秦の興亡

●秦の始皇帝 秦王政は天下統一の後、自ら始皇帝(シノクワウテイ)と稱し、封建の制を廢して郡縣の制をしき、國都咸陽(カンヤウ)に壯大な宮殿を築き、大いに帝權を盛にした。皇帝といふ尊號も始皇帝に始つた。帝はまた戰

皇帝尊號の始め

萬里の長城



秦始皇帝

國以來屢々支那に侵入した匈奴キョウコといふ北狄デキを撃ち破り、北邊ホクヘンに萬里マンリの長城を増築し、南は今の安南アンナム地方まで征服した。よつて秦の威名は遠く振ひ、諸外國は秦を訛ナマツつ

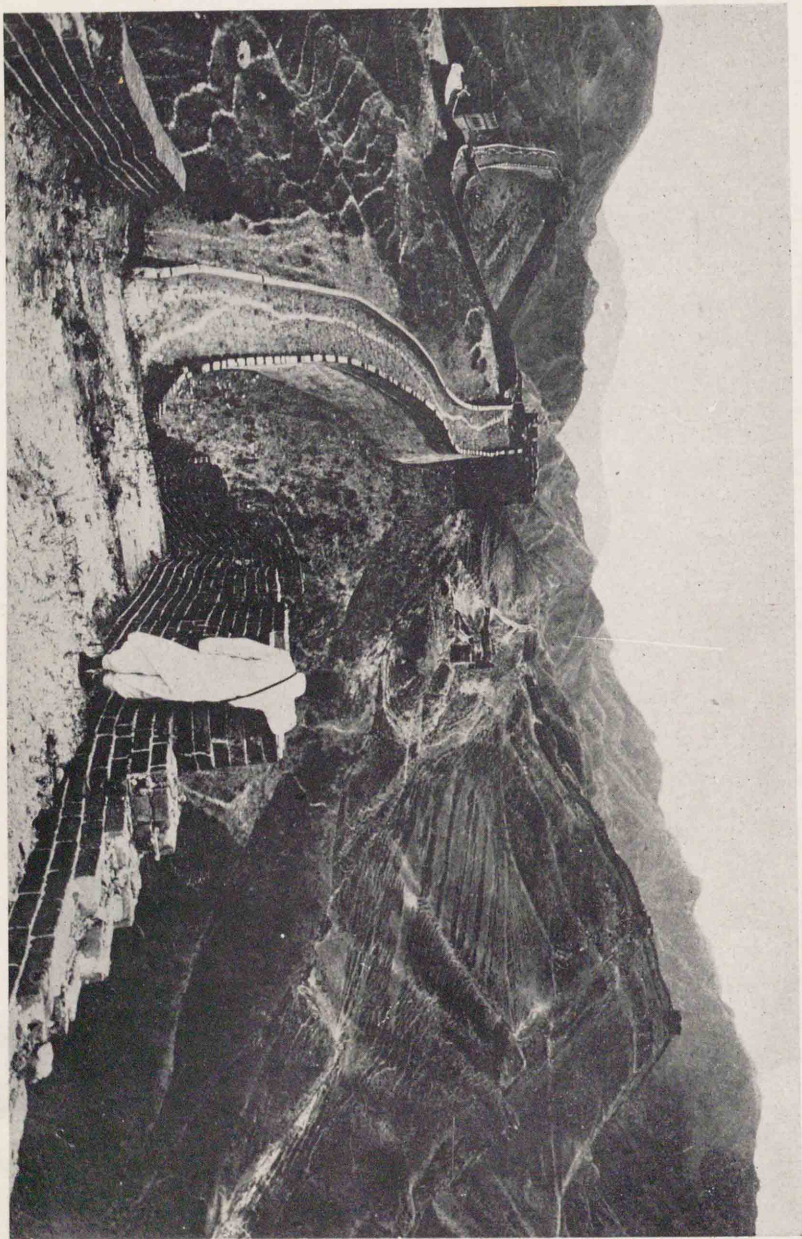
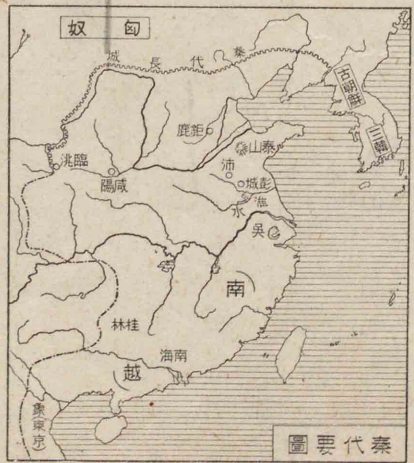
支那國號の起源

て支那と呼ぶやうになつた。

帝の内外の事業は實に偉大であつたが、國民はその専制政治センセイに苦しみ、これを非難するものがあつたので、帝は政治や思想に關する民間の古書を焼き、新政を批難する學徒を坑アミに埋め殺した。

② 秦の滅亡 帝の死後、いくばくもなく、叛亂を起すものが多く、中にも江東江蘇

燒書坑儒



萬里の長城

項・劉二雄

* 皇紀四五五、
元天皇御代、
紀前二〇六
西 孝

理想の幻滅

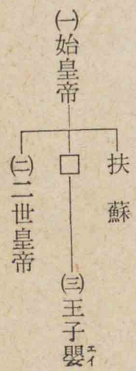
に起つた項羽と沛(江蘇省)に起つた劉邦とは最も有力な英雄で、共に秦

を攻め、劉邦まづ咸陽を陥れて、秦を滅した。かくて始皇帝が、三世三

世とかぞへて、萬世に至り、之を無窮ムキヨウに傳へん」と大言した秦の天下も、

始皇帝の死後僅かに三年で亡んでしまつた。
我が應神天皇の御代、秦の後と稱するものが朝鮮から歸化し、秦氏となり、蠶織を興
した。秦氏は今でもなほ少くない。

秦の系圖



第二節 前漢と後漢

漢の三傑

● 漢の高祖 秦の滅亡後、劉邦と項羽は、兩雄並び立たずの諺コトワザにもれ
ず、互に天下を争つたが、劉邦は蕭何、張良、韓信の三傑を善用して項羽

* 皇紀四五九、
元天皇御代、
紀前二〇二
西孝



(傳畫堂笑晩) 王霸の楚西

を滅し、自ら帝位に即き、長安(省陝西)に都
した。これが漢の高祖である。高祖
は實に一平民より身を起して天子と
なつた英雄である。

高祖の起した漢朝は、多年支那を治め
て、支那帝國成立の基を固め、その威名内外に振ひ、後世に傳はり、漢土
と漢人の名は、支那及び支那人の別名となつた。

漢土・漢人

文帝の仁政

①文帝・景帝 高祖の後、惠帝を経て、第
三世文帝即位するや、仁政を行ひ、民力
を休め、國庫を豊にした。その子景帝
の時も概して天下よく治まり、國力充
實した。

②武帝の功業 景帝の子武帝は雄才



(傳畫堂笑晩) 高の漢

武帝の内治

支那史學の父

大略あり、前代豐富の後をうけて天子となり、在位五十四年の間、内外
の政治ともに盛であつた。内治に於ては大學を興し、儒教と文學と
を奨励したので、秦以來衰へた文運は漸く復興し、また支那史學の父
といふべき司馬遷も、帝の時に現れた。しかし帝の功業はその諡の

武帝の外征

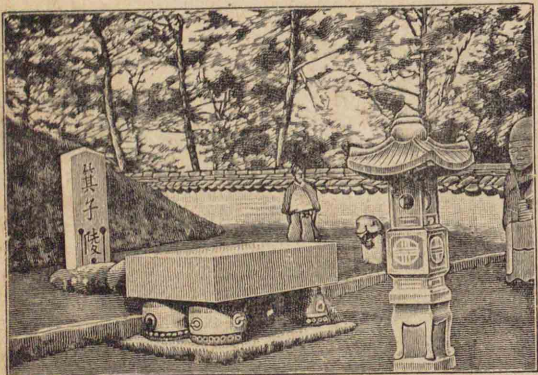
示す如く外征の武功に於て特に振つて居
る。

箕子と朝鮮

④古朝鮮と三韓 さきに殷が周に滅さる

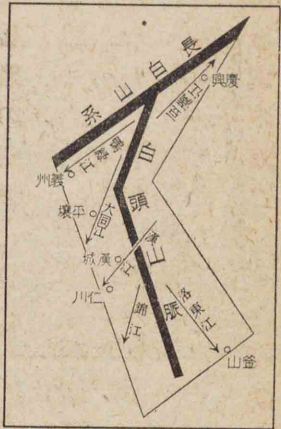
るや、殷の王族箕子はのがれて、古朝鮮に來
て、之を治めた。古朝鮮の地域は遼東より
朝鮮半島の北部に及び、箕子の子孫代々支
配して漢初に至つた。この時燕の人衛滿
は古朝鮮に入り、つひに箕子に代つて朝鮮
王になつたが、その孫の時、漢の武王は之を

衛滿の朝鮮

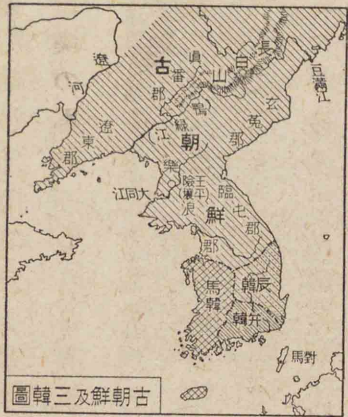


(壤平鮮朝) 陵の子箕

四郡設置
* 皇紀五五三、開
化天皇御代、西
紀前一〇八
日本・三韓・漢の
三土の交通



高祖と匈奴
武帝と匈奴



古朝鮮三國圖

武帝の晩年

漢の中絶 武帝の晩年は、度々の外征の爲、財政困難に陥り、鹽酒鐵の專賣法を行ひ、重税を課したので、天下騒動せんとしたが、やゝ方針

滅^{*}して、その地を漢の四郡とした。時に半島の南部は、馬韓・辰韓・弁韓の三韓に分れ、早くから我が國と交通があつたので、今や漢と三韓及び我が國との間に交通が開ける事となつた。

五 匈奴 當時北方の匈奴は支那の恐るべき大敵であつた。一時秦のために撃退された匈奴は、漢初に再び優勢となり、高祖は之を親征して大敗した。武帝は、祖先の恥を雪がんとして、屢兵を出してこれを撃退した。

その後の善政

* 皇紀六六八、垂
仁天皇御代、西
紀八

漢の中絶

劉秀（後漢の光武帝）

* 皇紀六九六、垂
仁天皇御代、西
紀三六

光武帝の治

外戚・宦官の專横

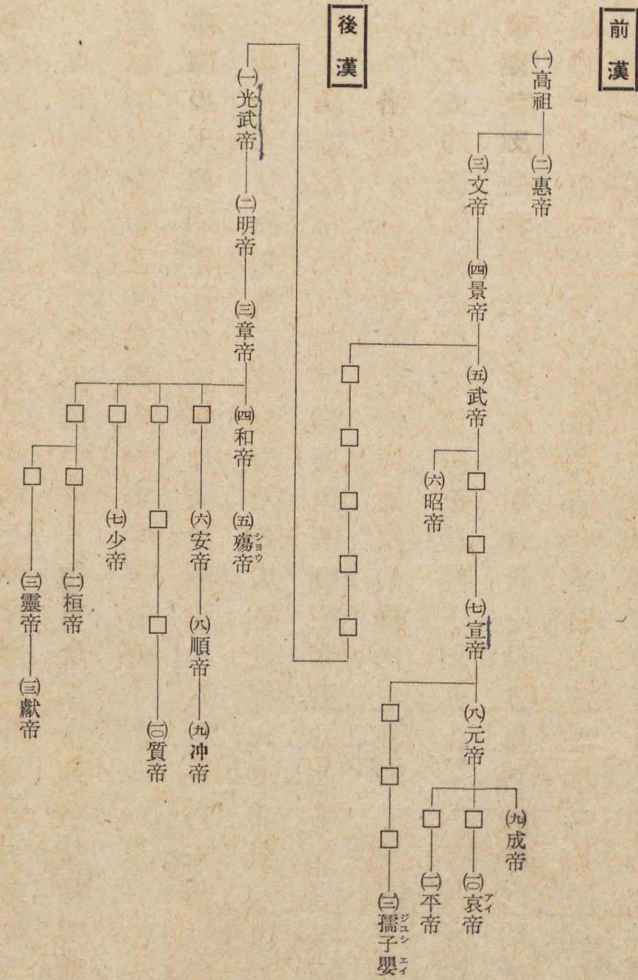
を改め、又その後の二代の善政によつて、天下はまた安定した。武帝より九十餘年にして、外戚の一族王莽は、漢室の衰微に乗じて帝位を篡ひ、國號を新と稱し、漢は一時中絶した。

七 漢の再興 されど人心は未だ漢を去らず、一方王莽は急激に制度を改革し、また重税を課したため、人心は離れて兵亂起り、新は僅かに十五年で亡んだ。時に群雄中漢の王族劉秀は、名望最も高く、衆に推されて天子となり、洛陽（周邑）に都し、群雄を征服して天下を統一した。これが後漢の光武帝で、以後を後漢といふ。

八 後漢の盛衰 光武帝は平和政策を執り、専ら意を内治に用ひ、節義を勵ました。その子明帝、孫章帝もよく國を治め、漢の國運また盛となつた。されど、第四世の和帝以後は諸帝多く幼弱で、外戚・宦官は漸く專横となつた。

九 後漢の滅亡 その後、後漢の政治は益々衰へ、人心漸く亂を思ひ、賊徒

漢の系圖



曹操の北支那統一

後漢の滅亡

* 皇紀八八〇、應
神天皇御代、西
紀二二〇

漢字の三體

四方に起つた。こゝに於て、或は賊を討ち、或は宦官を除くを名として、群雄相ついで起り、天下はまた亂世となつた。中にも曹操は最も智略に富み、後漢の獻帝を擁して北支那を統一し、遂に江南に向つたが、漢の王族劉備及び江南の豪族孫權の聯合軍に敗れた。曹操の子の曹丕は、後漢の獻帝を廢して、自ら魏國を建てて洛陽に都した。かくて漢は前後合せて約四百年にして亡んだ。

草 行 楷 隸 篆 文 古

日	日	日	日	日	日	日	日
月	月	月	月	月	月	月	月
魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚	魚
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥

(史通那支) 表字文今古

紙の發明
筆の精製

漢學

たが、後漢に至り紙の製造が發明せられ、秦時代に精製せられた筆ととも、大いに文化の進歩普及を助けた。

⑦漢學と我が國 漢學とは、漢土の學、即ち支那の學術であるが、漢代以後、この漢學が漸く發展して、つひに朝鮮を経て古代日本にも傳はつた。

古代朝鮮の三韓と我が國との關係は、すでにのべたが(三二)朝鮮は支那に近く、早くよりこれと交通し、支那の影響を受けて、學術・技藝が頗る進んでゐた。

この朝鮮が古代日本の勢力範圍となるに及びては、我が國は進んで技藝上の製作品を受け容れるのみならず、學者及び機械・裁縫等の技師等をも迎へて、日本文化の發展を補助せしめた。渡來した學者の中には、百濟の博士王仁最も有名にして、彼は漢學の精粹ともいふべき論語及び千字文を獻じた。これ即ち我が國に於て漢字・漢學を

王仁の來朝
漢學傳來の始め

攝取した始めである。

⑧漢と西域 西域とは、匈奴の西邊と、今の新疆省地方及びパミール高地以西の地方の總稱である。前漢の武帝は、中央アジアの大月氏國と同盟して、東西より匈奴を挾撃しようとして、張騫を大月氏に遣はした。これより始めて漢と西域諸國との交通は開けた。後漢の

張騫の西域遠使

班超の西域鎮撫



班超の西域遠征

世となつて、又大いに匈奴を撃破し、班超を遣はして西域諸國を鎮撫せしめた。彼は西域に留る事三十年に及び、大いに漢の威勢をかゝやかした。漢と西域との交通に伴ひ、葡萄・柘榴などの西方の物産が支那に傳はり、又支那の絹は西方に傳はり、當時すでに東西物産の交易が行はれた。またかやうな事情のもとによつて、印度に起つた佛教も西域を経て支那に傳はる事になつた。

東西物産の交易

班超の元氣

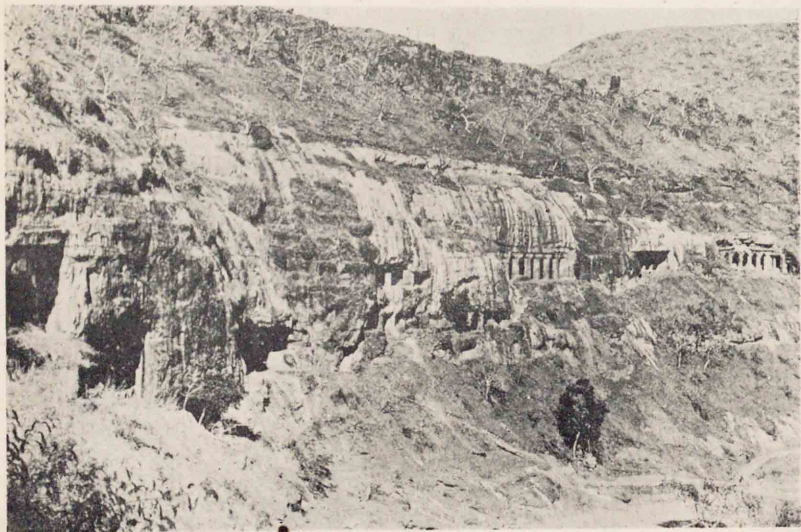
班超の西域にいつた時、匈奴の使者もまた西域にゐて、従者頗る多かつた。彼は「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」といふ元氣を出して、部下を勵まし、夜襲ひて匈奴の使者を殺した。これより西域諸國皆その威勢に恐れれた。

カニシカ王の盡力

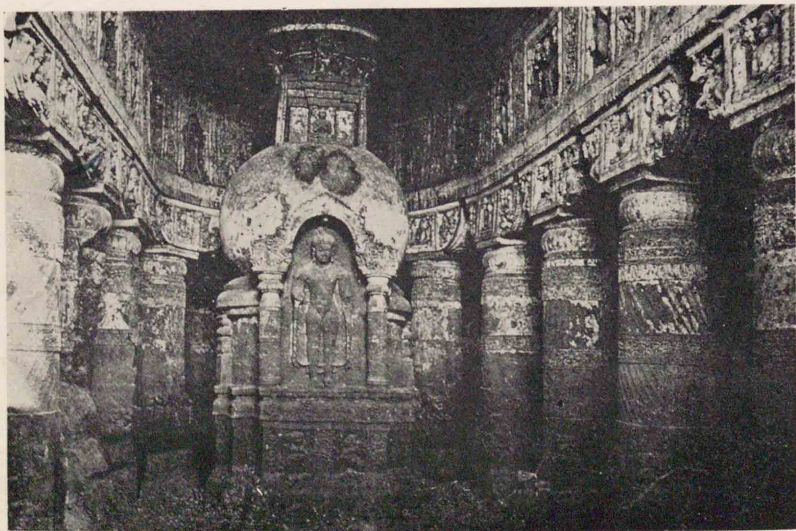
③ 佛教の東傳 前章第二節「上代の印度」に於て阿育王の佛教の傳播に熱心であつたことをのべたが（一七）阿育王の後また約三百年を経て、中亞細亞の大月氏國にカニシカ王^{Kanishka}が出て、また深く佛教に歸依して、その布教につとめたので、佛教は次第に東して天山南路にも傳はつた。而して天山南路の東方は即ち後漢の領地である。

後漢の明帝は西方に佛教があると聞いて、使者を大月氏に遣はして、佛典と高僧とを求めさせた*。これより佛教は漸く支那に行はれ、また朝鮮を経て本邦にも傳來して、東洋の一大宗教となつた。佛教が傳はるとともに、これに關聯した藝術も傳はり、支那文化と印度文化との融合^{ニウガフ}がこの頃から漸く始まるやうになつた。

佛教の支那傳來
* 皇紀七二七、垂
仁天皇御代、西
紀六七。百濟よ
り本邦に佛教を
傳へたのは、こ
れより約五百年
後なり
支那文化と印度
文化の融合



體大の觀外院洞窟石タシヤ



部内院洞窟石タシヤ

アジアンタ (Ajanta) は印度のボンベイ (Bombay) より東北の
 ハイデラバット (Hyderabad) 州内にある有名な佛教史蹟であ
 る。其丘陵の中腹に穿たれた二十九箇の石窟洞院の開創年
 代は、支那ならば、前漢時代より隋唐の際に至る時代に互つ
 て居る。

第四章 三國・兩晉・南北朝時代

● 支那の三國 前章に曹丕サウヒが後漢を倒して魏國キをたてた事をのべ
 たが(二五)、その翌年漢の王族劉備は成都(四川)に都して、帝位につい
 た。これを蜀漢シヨクの昭烈帝といふ。ついで江南の豪族孫權もまた今
 の南京に都して、吳ウといふ國を
 立てた。



諸葛亮 (傳畫堂笑晚) 亮 葛 諸

かくて支那の天下は三分して、
 魏は北支那に、吳は南支那の東
 部に、蜀はその西部によつて約
 四十年間も相争つた。蜀の地
 は最も小さかつたが、諸葛亮(字)
 は最

* 應神天皇御代の
 間
 諸葛孔明の忠誠
 武略

臥龍の名
草廬三顧
水魚の交
出師の表

死せる諸葛生ける仲達を走らす
御製御歌と孔明

孔明の力によつて、よく他の二國と並び立つことが出来た。昭烈帝の死後、諸葛亮は幼君を輔け、必ず漢朝を回復しようとして、魏を伐つたが、惜しくも志半ばで陣中に歿し、蜀は遂に魏に滅された。

諸葛亮はもと亂世を避けて、田野を耕し、立身出世を求めず、臥龍の名が天下の識者の間に高かつたので、劉備はその草廬を三顧して、之を臣とした。君臣の情、極めてこまやかで、水魚の交といはれた。征魏の軍に臨んで上表した前後二回の出師の表は忠誠のよく現れた文で、之を讀んで泣かざる者は忠臣に非ず、といふ評がある。孔明が陣中に歿するや、魏の兵は退却の蜀軍を追撃したが、蜀軍は少しもさわがず、將に之に向はうとしたので、魏兵は恐れて、敢て迫らなかつたといふ。よつて時の人々は「死諸葛走生仲達」といったと傳へられる。仲達とは魏の將司馬懿の字である。明治天皇御製 龍の臥す岡のしらゆきふみわけて草の廬を訪ふ人や誰 昭憲皇太后御歌 雪わけし深き心に臥す龍も今はと空に思ひたちけむ

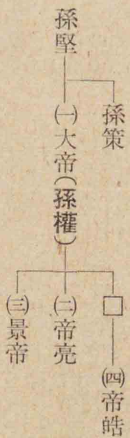
三國の系圖



魏



吳



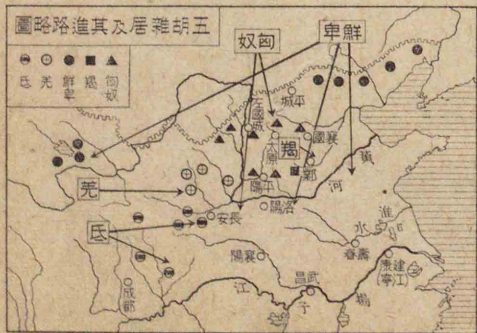
* 皇紀九四〇、應神天皇御代、西紀二八〇

西晉の國狀

清談 * 清談とは禮法を輕んじ、世務をいやしめ、専ら無益な空理を談ずるをいふ

西晉の統一 三國の中、魏は最も強く大きかつたがつひにその臣司馬炎に帝位をうばはれて亡び、司馬炎は更に吳を併せて天下を統一し、洛陽に都した。これを西晉の武帝といふ。

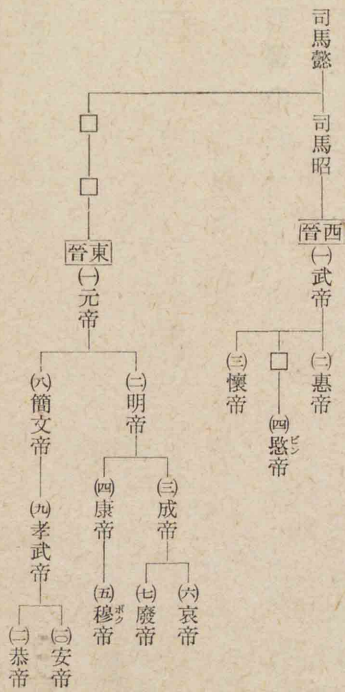
五胡の侵入 西晉の武帝は、支那を統一したけれども、天下は安定せず、士人は清談に耽つて國事を思はず、かねて内地に雜居した異種族の勢力は漸く大となり、西晉は之を防ぐ事が出来なかつた。これ等の異種族は匈奴、羯、鮮卑、羌



西晉の滅亡
南遷
* 皇紀九七七、
德天皇御代、西
紀三一七

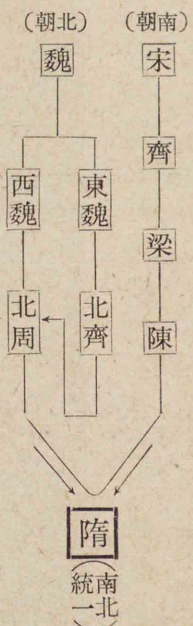
の五種であつたので五胡といふ。
④ 東晉 五胡の中、北方の匈奴が先づ強大にして、西晉の都洛陽を陥れ、一時これを滅したので、その一王族は今南京に都して、江南の地を保有した。これが東晉の元帝であつて、これより後を東晉といふ。東晉一百餘年の間、江南方面は大體平穩にして、文化は漸く開けるに至つたが、北支那は紛々たる争亂つねに絶えなかつた。

晉の系圖



東晉の滅亡

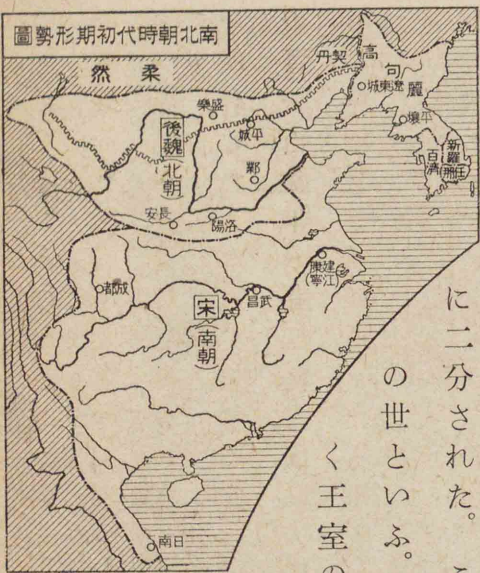
* 皇紀一〇八〇、
允恭天皇御代、
西紀四二〇
南北分立
* 皇紀一〇九九、
允恭天皇御代、
西紀四三九



九年を経て、鮮卑族より起つた後魏は江北を統一し、支那は大體南北

に二分された。これより約百五十年の間を南北朝の世といふ。この時代の形勢は大體上表の如く王室の更替の頻繁な事が注意される。

而して南方の四朝は、さきの東晉及び三國時代の呉の二朝と共に、今の南京に都したので、これ等を總稱して六朝といふ。
* 佛教の流行 後漢の世に佛教

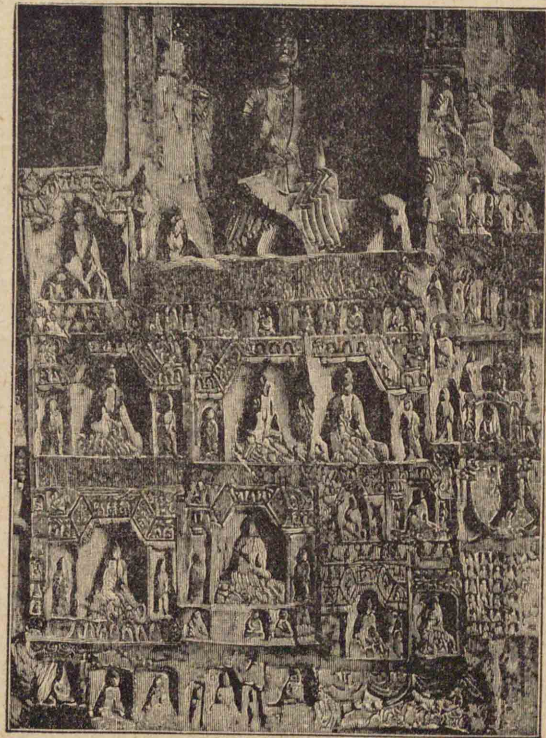


六朝

梁の武帝の信仰

僧侶の來往

が支那に傳はつてから、晉より南北朝と進むにつれ、佛教は大いに流行した。中にも南朝の梁の武帝(武烈繼體安閑宣化)は最も篤く佛教を信



後魏時代の石佛刻像(河南省洛陽縣南龍門)

じ、自ら三寶奴と稱した。當時西域より僧侶の來る者頗る多く、又支那の僧侶で直接に印度に行き、法を求むる者もあつた。佛教の流行に伴つて、藝術も大いに進歩した事は、今の山西省大同

藝術の進歩

朝鮮の形勢

及び河南省龍門の兩石窟などに見る事が出来る。さきに前漢の武帝が征服した朝鮮には、高句麗(カウク)が北に起り、後漢の末

佛教の東流

* 皇紀一〇三二、
仁德天皇御代、
西紀三七二
* 皇紀一〇四四、
仁德天皇御代、
西紀三八四

法顯

達磨

後魏の孝文帝の漢風模倣
國粹輕蔑の弊

から三國時代にかけて半島の北部を占領した。これと前後して百濟と新羅とが南に國を立て、三國鼎立の形となつた。支那に流行した佛教は朝鮮にも傳はる勢をあらはし、先づ高句麗は前秦(五胡十六國の一)より受けて之を新羅に傳へ、百濟は別に東晉より受けて、又我が國に之を傳へた。これは大體南朝の梁の武帝の子の時の事である。

晉より南北朝の間、東西の名僧の往來があつた。晉の末、支那の僧法顯は陸路を経て印度に往き、海路より支那に歸つた。往復十二年。初め同行十餘人、歸るに及んで法顯一人のみであつた。これが支那僧印度に入るの始めである。又彼の南天竺の達磨(Dharmma)大師が海路支那に來たのは梁の武帝の時である。

⑦ 漢人の同化力 當時北朝諸國の風俗は概して粗野剛健であつた。然るに、後魏第六世の孝文帝は國風の粗野なるを厭ひ、都を洛陽に遷し、祖國の衣服言語を禁じ、風俗言語等皆漢人に模倣せしめたので、その國人が頗る開化した。けれども、その王族貴人は、やうやく奢侈(オウエリ)にならつたので、國勢は次第に衰へた。野蠻民族が文化地方にうつる

漢人の同化力

と、文化を善用することは困難で、物質上の奢侈に流れ易い。これは古來北方蠻族の支那に侵入したものの常例である。さうしてまたこれは漢人の同化力の大きかつたことを物語るものである。

第五章 隋・唐時代

楊堅(隋の文帝)

南北の統一

* 皇紀一二四九
崇峻天皇御代
西紀五八九

文帝の治

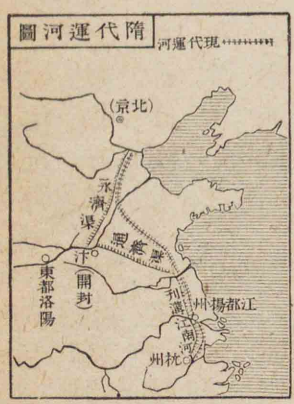
● 隋の統一 南北朝の末に至り、北朝の北周の外戚楊堅は、北周の帝位を篡つて即位し、隋といふ王朝をたて、長安に都した。これが隋の文帝である。ついで文帝は南征して陳を滅したので、五胡の侵入以來約三百年にして、漢民族は再び統一された。要するに南北對立に於て、柔弱な南人は到底剛強なる北人に敵せず、北朝系統の隋が遂によく天下を一統したのである。隋の文帝は力を政治に用ひ、民力の休養に努めたので、多年の亂世に疲弊した漢民族の力は漸く恢復し

て來た。

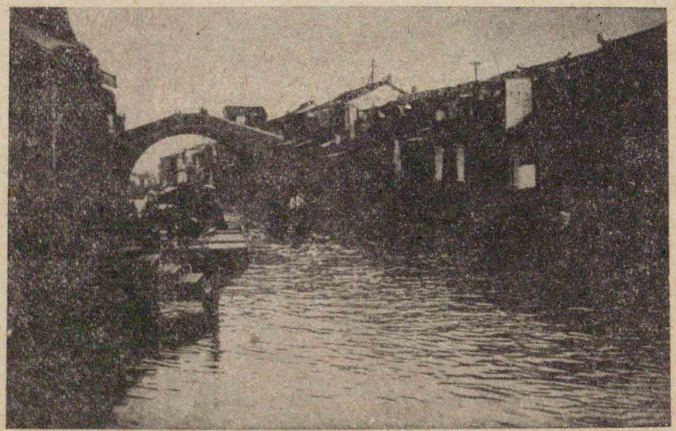
我が國と隋の國交

運河の濫用とその利用

● 隋の煬帝 文帝の子煬帝は、豪華を好んで宮殿を造り、運河を開き、又屢、遠征を企てて國威を發揚しようとした。我が推古天皇の御代、小野妹子を遣はして、支那との國交を開かれたのも、この煬帝の時である。煬帝の造つた運河は帝の遊樂の目的の爲にも用ひられたが、また支那の南北を結ぶ主要交通線として利用され、その經濟上の意義は決して小さくない。



● 隋の滅亡 既にして煬帝は高句麗を征伐



(真寫) 河運の方地州蘇省蘇江

*皇紀一二七八、
推古天皇御代、
西紀六一八
唐の高祖
秦・漢と隋・唐と
の比較
日・支國交の始
め

して失敗を重ねるや、かねて苦役に惱んでゐた國民は、諸方に亂を起した。その中にも李淵は、その次子李世民と共に兵を擧げ、つひに長安に入り、帝位に即いた。これが唐の高祖である。かくて隋は三十七年にして亡んだ。その國運の短き事、先の秦に類し、又隋の次の唐の國威盛にして、國運の長いことは、恰も秦の次の漢に似てゐる。
推古天皇十五年(煬帝即位の三年)小野妹子を隋に派遣した。これが日・支國交の始めである。

隋の系圖

高祖文帝 (一) 煬帝 (二) 恭帝 (三)

唐の太宗の功業 唐は國を保つこと大
約三百年(一、二七八—一、五六七、推古天皇(醍醐)漢ととも
に支那民族の建てた世界的大帝國である。この唐の高祖、建國の事業は、次子李世



唐の太宗

漢・唐の二大帝國
李世民の力

英主と名臣

民の力によることが多大であつたので、高祖は在位數年で位を李世民に譲つた。これが唐の太宗である。太宗は文武兼備の英主であつて、房玄齡、杜如晦、李靖、李勣等の名臣を用ひてよく天下を治め、國威を四方に



房玄齡(凌烟閣功臣圖)

太宗貞觀の治

輝かした。後世之を貞觀の治といふ。貞觀は太宗の年號である。

濟世安民の人相

三鏡の教訓



太宗宗帝範太子子賜(聖諭像解)

太宗は、その幼少の時、濟世安民の人相があつたので世民と名づけたといふ。帝は常に修身治國に注意し、銅を以て鏡とせば、衣冠を正すべし、古を以て鏡とせば、興替

帝範

を見るべし。人を以て鏡とせば得失を知るべし。といひ、また帝は親ら「帝範」四卷を撰し、以て太子に賜はつた。

百濟滅亡

* 皇紀一三二三、
天智天皇即位前
五年、西紀六六
三

高句麗滅亡

* 皇紀一三三八、
天智天皇即位の
年、西紀六六八

新羅の一統

突厥その他の外

漢民族の大發展

武后の即位

⑤ 外征 唐初朝鮮には、高句麗・百濟・新羅の三國が鼎立し、高句麗・百濟は連合して新羅に當つたので、新羅は唐に援を請うた。唐の太宗は高句麗を親征して失敗したが、次の高宗は新羅と協力して、先づ百濟を滅し、次いで、高句麗を併せ、平壤に安東都護府を設けて、その地を統べた。新羅はよく唐に事へて國を保つたが、後には唐に叛いて半島を一統した。太宗と、その子高宗は更に兵を北に向け、當時蒙古より中央アジア迄を占領せる突厥を討ち破り、或は西藏を伐ち、それより印度に通じ、或は南海諸國を來貢せしめ、唐の國威の及ぶ所甚だ廣く、實に漢民族として、殆ど空前絶後の發展をなした。

⑥ 則天武后 高宗の皇后武氏は權略に富み、高宗の死後、自ら帝位に即き、國號を周と改めた。これを則天武后といひ、唐は一時中絶した

* 皇紀一三七二、
元明天皇御代、
西紀七一二

節度使の設置

安祿山の亂

顏真卿の忠義

唐の衰運

唐の滅亡

* 皇紀一五六七、
醍醐天皇御代、
西紀九〇七

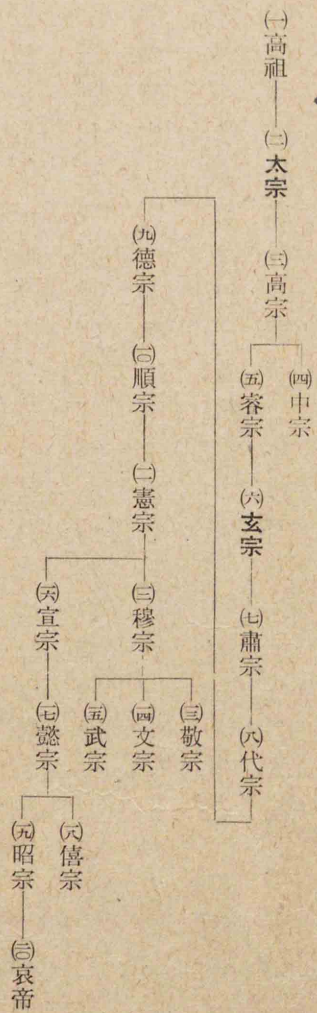
が、間もなく唐は復興して、玄宗のはなやかな時代となつた。

⑦ 玄宗の世 唐の第六世玄宗は、即位の後大いに意を内治に用ひたので、天下は太平にして文化は進歩した。玄宗はまた四邊の要地に節度使を置き、兵權を委ねて四方を守らせたので、一旦衰へた唐の國威はまた振興した。

然し晩年、帝は政治を怠るに及び、東北方面の節度使安祿山は叛亂を起した。帝は一時國都長安を逃れ去つたが、顏真卿、郭子儀等の勤王軍が奮闘し、又一方賊に内訌があつたので、叛亂は幸に平定した。

⑧ 唐の衰亡 唐は玄宗に至るまで、既に百四十年ばかりの盛時を経過し、玄宗以後尙百五十年程續いたが、安祿山の亂後は、國力漸く衰へ、節度使の横暴、宦官の專横、財政の困難となり、唐は遂に大木の枯るゝが如く亡んだ。

唐の系圖



三省・六部
道・州・縣

●唐の制度 唐の制度は、大體その最盛時なる太宗・高宗二代の世に成つたもので、支那後世の模範となつた。(官制)中央政府には三省・六部がある。三省は尙書中書門下といひ、天下の大政を統べ、六部は尙書省に屬して政務を分擔するものにして、吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部の六部より成り、地方制度は、天下を分つて十道とし、道の下に州と縣とを置き、州に刺史、縣に令を置いて民政を掌らしめ、各道に巡察使

李白・杜甫

韓愈・柳宗元

白樂天

書畫・音樂



(傳畫堂笑晚)(左)甫杜(右)白李

ありて之を監督した。

●唐の文藝 玄宗以後、唐の文學は隆盛を極めた。即ち玄宗の時には李白・杜甫の二大詩人が出て、その後約五十年にして韓愈・柳宗元の二大文豪が出現した。又古來我が國人に愛讀せられた白氏文集の作者なる白居易(白樂天)もその頃の詩人である。詩文の發達の外に書畫・音樂の如きも進歩を示した。

國破山河在。城春草木深。(杜甫)

國破れて山河あり、城春にして草青みたり。(世蕪奥の細道、平泉懷古の條)

人皆有一癖。我癖在章句。(白居易)

人ごとに一つの癖はあるものを我にはゆるせ敷島の道 (慈鎮和尚)

白樂天の作をあつめた白氏文集は、甚だ廣く我が國にも行はれた。謠曲にも「白樂天」と題するものがある。それによると、唐土の學を誇る白樂天は我が日本の智慧

日本精神の顯揚

を計らんとして來朝し、海邊の漁翁に試問した。翁は和歌の力を以て住吉の神を現じ、更に全國の諸明神之に應じて舞ふので、それに驚いた彼は唐土へにげ歸るといふ筋にして、其終りは「實に有難や神と君、實に有難や神と君が代の動かぬ國ぞ久しき動かぬ國ぞ久しき」と結んである。支那文化の勢力の大きかつた唐代の大詩人白樂天を題目として、日本精神をあらはしたものである。

⑤ 佛道二教 「佛敎」佛敎は南北朝流行の勢をうけ、唐に至つて更に盛



玄奘の渡天圖 (宋代又は元の原圖)

となつたが、當時流行した佛敎の分派には、三論法相華嚴律成實俱舍天台眞言の八大宗派があり、これ等の宗派は我が奈良朝か

ら平安朝にかけて、概ね我が國にも傳はつた。

唐の太宗の時、玄奘は天山南路中亞を経て天竺に入り、往復十七年間に百三十餘國

八宗

玄奘及び義淨の渡天

を遊歴し、經論六百五十餘部を得て還り、これを翻譯して、支那佛敎史上に一新紀元をなした。又高宗の時、義淨は海路から天竺に入り、往復廿四年を費し、經論四百餘部をもたらしした。

「道敎」神仙の術に老莊道家の説を混合した道敎も、また唐に至つて盛となり、唐の皇室はこれを以て正敎とし、老子を以て祖先として崇めた。

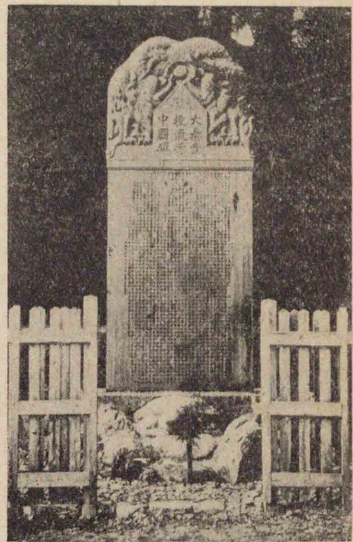
⑥ 通商と諸外教 唐の世界的大帝國の建設は、東西の交通を促し、亞細亞の西部にあるアラビヤ人も印度洋を航海して、支那に象牙犀角胡椒香料等を輸入した。また東西交通の開けたため、中亞方面に流行して居た諸宗敎は漸く支那に傳はつた。中にも景敎と回敎とは最も注意すべきものである。景敎は即ち基督教の一派であるネストル敎であつて、回敎は即ち阿剌比亞のムハメドの唱へたイスラム敎である。

シリヤ人阿羅本

景敎の支那に傳はつたのは、太宗の時シリヤ人阿羅本が支那に來て、太宗の尊信を

大秦寺

弘法大師と景浄



大秦景教流行記中興碑
(陝西關中道長安縣中興碑)

があつたといふ縁故によつて、明治四十四年、高野山に模形の景教碑が建立されて、

受けたのに始まり、玄宗等もこれを信仰した。その寺を大秦寺といつた。この圖は唐より八百餘年後に、唐の首府長安即ち今の長安縣より發掘した當時の景教流行の紀念碑である。この景教碑を建てた者は、大秦寺の僧、景浄といふシリヤ人であるが、我が國の弘法大師は入唐中にこの景浄と關係

通商
遣唐使及び留學生

●日・唐交通 我が日本は既に隋と修交したが、唐に至つて、その關係は益々密接となり、我が國からは屢々遣唐使を派遣し、また僧侶學生の入唐した者が多い。中でも弘法傳教の兩大師、吉備眞備、阿倍仲麻呂等は最も名高い。當時我が國が大いに唐の制度文化を攝取參考したことは、恰も明治時代の歐米に於けるやうであつた。

唐の制度は、支那後世の模範となつたばかりでなく、我が國古代の制度も唐制による所が多い。これと同じく唐代前後の風俗も亦大いに我が國に傳はつた。例へば、正月元旦の屠蘇酒の祝杯、同七日の七夕の食事、三月三日の曲水の遊、四月八日の灌佛の式、五月五日の端午の祭と菖蒲湯、七月七日の七夕祭、同十五日の中元、盂蘭盆の供養、九月九日の菊の酒、歳の終りの追儺のはらひなどである。

第六章 五代・宋時代 渤海の興亡

五代の亂世五十年

内外の關係

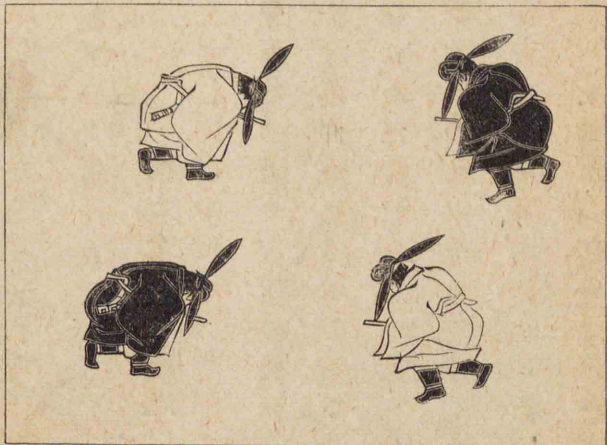
遼の建國

●五代 唐の亡びし後、五十餘年の間、支那の中原には、梁、唐、晉、漢、周の五代、忽ち興り忽ち亡びて、みな統一の功を成さず、紛争やむ時なく、文學は衰へ、教化も廢れた。

●遼と渤海 漢人の内に弱い時は、異族外に興るのが原則のやうで、唐末衰弱の際より、今の遼河の上流地方を占領した契丹人の勢力漸く興り、五代の初め、その酋長は皇帝と稱し、滿洲及び内蒙古に互る領

渤海の興亡

*皇紀一五八六
頃、醍醐天皇御
代、西紀九二六



新・鞞の鞞(新) 鞞の鞞(新) 鞞の鞞(新) 鞞の鞞(新)
(りな體の踏舞禮拜はふ舞てし腰屈のそ舞俗風の鞞鞞) 鞞の鞞(新)
(説圖樂舞) (樂 邦)

*皇紀一六二〇、
村上天皇御代、
西紀九六〇

英主の統一政治を望んだ。幸にして五代の末、趙匡胤といふ一英雄が衆に推されて、帝位に汴京(河南)に即いた。これが宋の太祖である。太祖は平和を旨とし、國民の休養に注意したので、國民漸く安堵する

オチツクコト

武力の弱

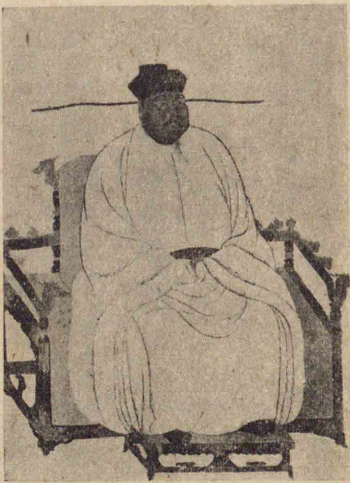
宋の仁君

先憂後樂の名言

王安石の新法

司馬光の反對

新舊二派の政争



宋 太 祖

次の仁宗は、宋代第一の仁君として名高く、また士は當に天下の憂に先だちて憂へ、天下の樂に後れて樂しむべし。といつて、天下の事に熱心な范仲淹、その他の名臣大儒が少くなかつたけれども、外に對する勢は、なほ振はなかつた。

第六世の神宗に至り、深く之を憂へて、王安石を任用し、富國強兵の策をたてて、種々の新法を行はしめたが、國民には反つて不便の點が多かつたので、司馬光等は之に反對し、是より新法舊法の政争三十餘年

ことができたけれども、武力はやゝ弱くなつた。太祖の弟太宗に至り、天下を統一したが、宋は建國の初期以來、常に外敵に苦しみ、その後つひに遼に多額の銀と絹とを贈つて平和を維持した。



司馬光

に及び、政務は振はず国力ますます衰へた。
司馬光は幼少より明敏であつた。遊戯の間、一兒あやまつて水甕の中に陥つた。衆兒みな狼狽してゐる間に、司馬光は石をとり、水甕を撃ち砕きて、水とともに流れ出づる小兒を救つたといふ。また司馬光は内外の人に信じ尊ばれ、その歿するや京師の人は休業して敬意を表し、その肖像畫がよく賣れて、像を描いた畫工は富を致したといふ。

石とりてくだきしかめの水よりや惠の波は世にあふれけん 高崎 正風

女眞族の建國

* 皇紀一七七五、
鳥羽天皇御代、
西紀一一一五

遼の滅亡

強き金と弱き宋

④ 金の勃興 宋は遼といふ外敵ありしが上に、また滿洲より女眞族起り、その酋長アクダ(阿骨打)は遼の軍を破り、皇帝と稱し、會寧(滿洲吉林省)に都して國を金と號した。アクダは即ち金の太祖である。遼の攻撃に苦しめる宋の徽宗は金起れりと聞き、ひそかに之と結んで、共に遼をうつことを約し、宋は南から金は北から攻めて、つひに遼を滅したけれども、この役、金は宋人の弱いことを看破し、遼に代つて

宋の國辱

* 皇紀一七八七、
崇徳天皇御代、
西紀一一二七
* 皇紀一七九八、
崇徳天皇御代、
西紀一一三八

北宋と南宋

不名譽なる平和

宋・金の衰運

宋に侵入して、その都を陥れ徽宗父子を執へて北に還つた。そこで高宗が位に即いたが、金の鋭鋒を揚子江南に避け、つひに都を臨安(江浙)にさだめた。かくて高宗より以前を北宋といひ、以後を南宋といふ。

此處まで



岳飛

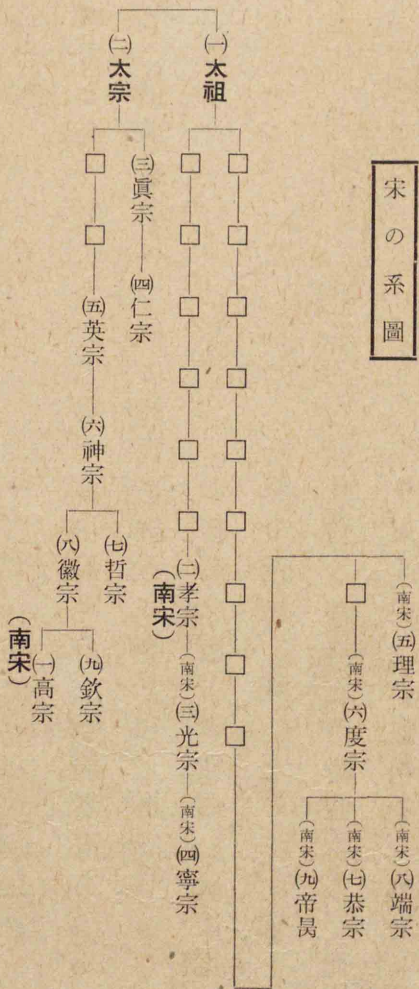
⑤ 南宋と金 南宋の初、忠勇なる岳飛等の主戰論者もあつたが、宰相秦檜は和議を唱へ、つひに歳貢を納めて、金と和した。しかし、金もこの後、漸く南方の文弱の風に化して、蠻勇の元氣を減じたので、南宋と同じく衰弱した。その時蒙古人が北方に起り、東洋史上の形勢を一變せしめた。その事は次の章にのべる。

支那人が兵力で蠻族と戦ひ、勝利の確實であつた古來の名將の中、岳飛は特に名高い。岳

盡忠報國のまじこころ

飛の忠勇は、金人も之を畏れ、その死んだことを聞くと、酒を酌んで相賀した。彼はまた「盡忠報國」の四大字をその背に入墨した。岳飛曰く「運用之妙存於一心」こと。活用を貴ぶは、戦略のみでないのである。 井上文雄

宋の系圖



宋の特色は文なり
*皇紀一八六〇、士御門天皇御代、源頼家の時、西紀一二〇〇、朱熹卒す、年七十一

⑥ 朱子學 宋の特色は武にあらざして文にある。漢・唐の儒者は、經書の字句の解釋に力めたが、宋の儒者は高尚なる哲學的研究に進み、南宋の朱熹に至つて、この新しき學風を大成した。これを宋學また



朱子學

尊王賤霸の説

陽氣と精神

蘇東坡の詩文

司馬光の史學

禪宗の流行

繪畫の奨励



朱子 (傳畫堂笑晚)

は朱子學といつて、本邦にも傳はり、特にその尊王賤霸の説は、我が國民にも深い感動を與へた。また朱子の論語・孟子・大學・中庸の四書その他の註釋は、今もなほ甚だ廣く我が國にも行はれてゐる。

陽氣發する處、金石もまた透る。精神一到、何事か成らざらん。(朱子格言)

⑦ 文學史學

宋は唐とともに文學の盛な時代で、詩文の名家が多く

世に出た。特に蘇東坡は詩文に兼ね長じて有名である。歴史の學

も進歩し、司馬光の資治通鑑は宋代の最も名高い史籍である。

⑧ 佛教 佛教もまた盛に行はれ、特に禪宗が最も盛で、美術とともに

我が國に傳はつた。

⑨ 美術 美術も進歩し、徽宗は天子にして畫道にすぐれ、自ら花鳥な

どを畫き、また繪畫の奨励に注意した。

印刷文化

⊕ 印刷術 古代の書籍は皆筆寫ヒツシヤしたものであつたが、隋唐の頃から佛畫の印刷が始まり、五代を経て宋に至つては、その他の圖書も多く印刷され、大いに文化の普及を助けた。

喫茶の流行

⊕ 喫茶 喫茶の風も、唐より宋にかけてますます流行し、他の文化とともに我が國にも傳はつた。

第七章 元時代

蒙古の過去とその名稱は世界的なり

● 成吉思汗即位 今や蒙古人の一部は中華民國に屬し、その一部分は露西亞に屬し、又その一部は近く滿洲帝國に合し、全體として政治上大なる勢力はないけれども、その過去を顧みると、大いに人意を強うするものがある。彼等は六七百年前、古今無比の大帝國を建て、その名は世界に鳴り渡つた。

英雄鐵木眞



蒙古包

* 皇紀一八六六、源實朝の時、西紀一二〇六、成吉思汗の尊號

矢の教訓

蒙古人は蠻勇の元氣を有し、簡單な生活に甘んじ、騎射に長じ、軍紀が特に嚴であつたから、その戦闘力最も強かつた。成吉思汗から十餘世の先祖にアラン媛といふ者があり、五子を生んだ。五子の父はすでに死に、五子が不和の事があつた。その母が或日五子をならべ、一本の矢を與へてこれを折らしめ、皆容易に之を折つた。又五本の矢を一束にして折らしめたが、皆折ることが出来なかつた。そこで母は、

蒙古部は、もと外蒙古の黑龍江の上流、オーノン・ケルレン兩河の地方に遊牧し、遼と金に屬して居たが、宋末になつて鐵木眞といふ英雄が現れた。彼は幼少の頃孤となり、逆境の間に成長して英雄となり、蒙古部の長となつてナイマン等の諸部を併せ、略、内外蒙古の地を占領して、つひに諸酋長をオーノン河上に會して、大汗大の位に即き、成吉思汗強盛な大といふ尊號を受けた。

不和孤立の害と、共同一致の利を教へたといふ。

新字
月行
憲宗

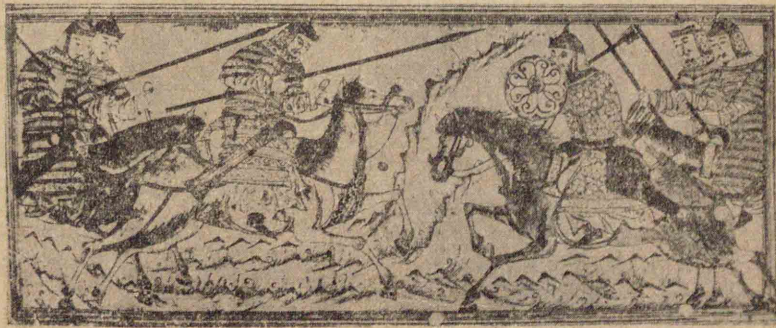
西夏の降服

金の屈服

露西亞に侵入す

*皇紀一八八七、
後堀河天皇御
代、北條泰時の
時、西紀一二二
七
太祖の戰略神の
如し

◎成吉思汗の遠征 劉邦と項羽との兩雄を合せて一つにしたやうな成吉思汗は、先づ支那西北部の西夏を降し、ついで金を攻めてその黄河以北の地を取り、更に軍を西方に轉じて、中央亞細亞の諸國を征服し、また別に將を遣はして今の露西亞に侵入せしめ、一旦東方に凱旋した後、つひに西夏を滅し、更に金を攻めようとして、陣中に病死した。これを蒙古の太祖といふ。太祖は兵を用ふることが神のやうであり、その一生に征服した地は、内外蒙古、天山南北路、支那の西北部と中西亞細亞等に互り、實に拔群稀代の英雄であつた。



士騎裝武の代時古蒙

金の滅亡

高麗の降服

拔都の歐洲侵入

*皇紀一九〇〇年
前後、四條天皇
御代、西紀一二
四〇前後
欽察汗國

◎二世太宗

太宗(名はオゴタイ)は父太祖について立ち、つひに金を滅した。當時朝鮮半島には五代の初期に起つた高麗といふ國があり、これまで宋・遼金の三大國に對して、巧にその國を維持してゐたが、太宗はこれを攻め降し、東方に於ては、ただ弱い南宋が残つてゐることとなつた。

そこで、太宗はさらに西方の大遠征を企て、拔都(太宗の兄の子)を元帥として歐洲に侵入せしめた。拔都は先づ今の露西亞を攻め、遂に中部歐洲に攻め入つて、大いに歐洲諸國を恐れしめたが、太宗の死を聞いて軍をかへし、露西亞の東南部に欽察汗國を建てた。

太宗より後も、蒙古軍は、或はまた遠く西亞細亞を遠征して、將に埃及に入らうとし、或は南方の雲南地方を攻め降して、益、その領地をひろめたが、太祖について名高いのは、太祖の孫なる蒙古第五世の世祖忽必烈汗である。

*皇紀一九二〇、
龜山天皇御即位
の年、北條時宗
の時、西紀一二
六〇
遷都と國號の新
定
宋の滅亡
*皇紀一九三九、
後宇多天皇御
代、西紀一二七
九

文天祥の正氣歌

東征の失敗

南征の成功

④ 元の世祖 世祖は位につくや、これまで外蒙古にあつた都を今の北京に遷し、國號をたてて元といひ、ついで南征して、南宋の臨安の都を陥れた。南宋の忠臣文天祥をはじめとして、勤王の人々は防禦と回復とにつとめたけれども、厓山(廣東)の戦に敗れ、宋は太祖以來三百二十年で亡んだ。

文天祥は博學で、官は丞相まで昇つた。忠義の心が極めて深く、力を宋の回復に盡したけれども、武運つたなく、終に元軍にとらへられ、二年間も土窟の獄中にあつた。しかもその節操は益々堅く、つひに死についた。獄中の作である正氣歌は、甚だ有名で、我が藤田東湖や吉田松陰も、またこれに和して、おのゝ正氣歌を作つた。身はかくてひとやのうちにくちぬとも心ばかりはいかでけがさん

佐々木弘綱

世祖はまた前後二回我が國にも侵略を試みたが、大失敗に終つたことは、我が國史にあらはれてゐるから、今更に之を説く必要もあるまい。世祖の地慾はなほこれに満足しないで、ジャヴァスマトラ等の南洋



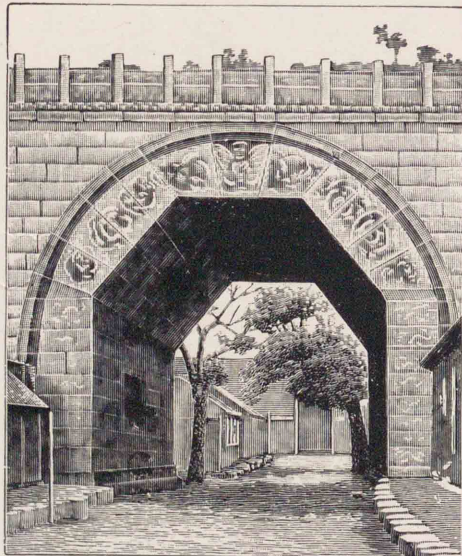
祥天文の宋(三)
(像畫堂笑晚)



祖世の元(一)



字二孝忠の意筆祥天文(四)



關庸居(二)

- (一) 元の世祖が祖父成吉思汗以來の遺業を大成して、大帝國を建てた事の
の概要は、本文に載せてある。
- (二) 居庸關は、北京の北の昌平の西四里許にある。京張鐵道の南口停車
場よりは二里許である。此關門は元の世祖の創築にかかり、關の長
さ二十二尺、高さ四間、廣さ四間、佛像を彫刻し、且つ漢字・蒙古字・梵字・西
藏字・西夏字・ホルイク字(西藏語の一種)の六種の文字を以て、喇嘛教禮
讚の文が刻されてある。印度・西藏・支那及び蒙古の藝術趣味を混合
加味した建築は宏壯雄大で、彫刻の精巧活躍してゐる状は、當時の元
氣充實せる時代精神を發揮したものである。
- (三) は文・天・祥の像。(四) 圖に示す所の忠・孝の二字は文・天・祥の筆意を模し
たもので、唐崎常陸介が廣島縣賀茂郡竹原町磯宮八幡社内の手引嚴
に刻したものである。

空前の大國

貿易及び文化の
發展

マルコ・ポーロ

ジパング(日本
國)始めて西洋
に知らる
アメリカ新大陸
發見



ローポ=コルマ

諸島をも征服した。

五 東西の交通 かくて蒙古は太祖より
世祖に至るまで、凡そ八十年の間に亞歐
の二大陸に跨る空前の大帝國をつくり、
その間にあつた諸國が滅び去つたので、
東西の交通は大いに開けた。當時東に
來た西人の中最も名高いのはマルコ・ポ
ロである。

マルコ・ポーロはもと伊太利^{Venice}の商人である。彼は十七歳の時父と共に故
郷を出で、元^{Yuan}に留ること十七年、大いに世祖に信任せられた。後本國に歸るや、東方
見聞録を公にした。西洋諸國殆ど之を翻譯しない國なく、我が國も之を翻譯し、ま
た翻刻した。また我が國は同書によりジパング^{Nippon}(日本國)の名を以て始めて歐洲に
紹介せられた。かのコロンバスの如きも、此の書を愛讀し、大西洋より直航して、東
亞に到らんとし、其の間に思はずもアメリカ新大陸を發見したのである。世の中

衰運の原因

ラフ教傳、イ
の、
帝師

朱元璋の旗擧げ

元の滅亡

*皇紀二〇二八、
後村上天皇崩御
の年、足利義満
の時、西紀一三
六八

小説・戯曲の發
達

の史實の關係は、まことに微妙なものである。

⑥ 元の衰亡 元は世祖の時、隆盛を極めたが、その後漸く衰へた。その主なる原因は、(一)元の領土は廣きに過ぎて、統一の政治がなかつた事。(二)元の相續法は、必ずしも父子の相續を認めなかつたので、帝位相續の際は常に紛争があつた事。(三)元は連年の戦争で財政困難となりし事である。こゝに於て、かねて蒙古人の下に屈服するを悦ばない漢人は、四方に亂を起した。中にも朱元璋は今の南京に據つて、帝位につき、國を明と號し、北征して元の都(北京)に迫つたので、元天子は遂に蒙古に逃れた。斯くて元は世祖が國號を建てて以來九十八年で亡んだ。

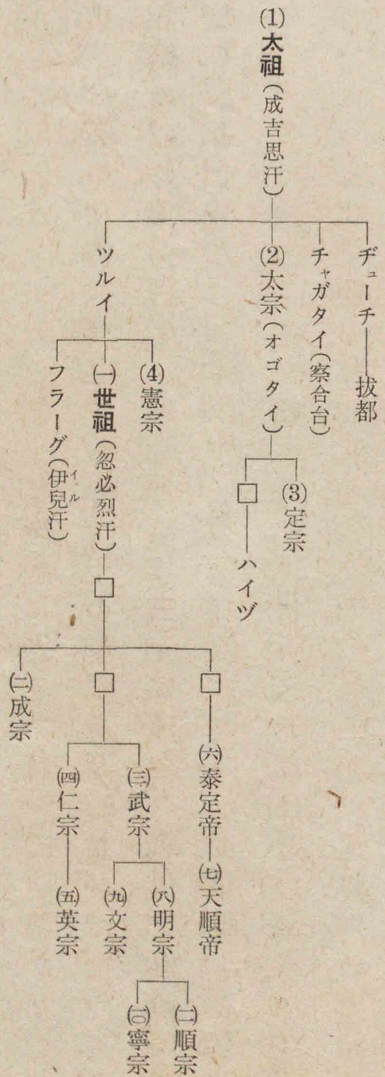
⑦ 小説・戯曲 元時代には、小説・戯曲などの大衆文學が發達して、三國志・演義水滸傳などの小説が出た。これ等の小説・戯曲は、ともに我が國に傳はつた。

⑧ 科學の進歩

次にこの時代の學術の新潮流は、科學の進歩である。元の時には東西交通の開けると共に、西方の學術は支那に傳はり、その天文・曆法の進歩を助け、郭守敬の如き學者があらはれた。

蒙古(元)の系圖

(西洋數字は元といふ國號制定前、日本數字は國號制定後の世數)



第八章 明時代

漢人の天下

* 皇紀二〇六二、
後小松天皇御
代、足利義持の
時、西紀一四〇
二、永樂帝の北京遷
都

● 明の太祖 前章の六項にのべた朱元璋は、即ち元の次の王朝たる明の第一世太祖である。彼は武を以て亂を定め、文を以て國を治めたので、漢人はまたこゝに漢人の天子を戴くことになった。太祖はまた諸子を封じて、帝室の藩屏としたのはよいが、死後の事を心配し過ぎて、多く功臣を殺したのは失策である。

● 明の盛世 太祖崩じ、孫惠帝が^{ケイ}ついだ。帝は諸藩王の強さを恐れ、これを抑へやうとしたが、叔父燕王は兵をあげて、反つて明の首都金陵^{南京}を攻め、つひに惠帝に代つて天子となつた。これが第三世の成祖^{永樂帝}である。

成祖は後に首都を今の北京に遷し、北は韃靼^{タタール}（元の改名）を征し、南は安南



器 陶 の 那 支

陶器は支那の世界的名産の一である。
我國の陶器工業の進歩も近古支那特
に明代以後の支那に負ふ所が少くな
い。

鄭和の遠洋航海

を伐つたのみならず、惠帝の或は海外に逃れたるやを疑ひ、鄭和に命じて、これを探らしめた。鄭和は前後七回、南洋及び印度洋に遠洋航海して、明の恩威を示したので、同方面の諸國は多く明に入貢し、明人は國家の名譽として誇つた。成祖の後、約四十年は、明の極盛の世と稱せられた。地度まで

永樂錢の輸入



日・明交通 足利時代に至りしば、明と交通し、明の永樂錢は、これより本邦に輸入せられた。その外、明より藥種、織物などが我が國に輸入され、僧侶、畫人などの明にゆきしものが少くなかつた。

北虜と南夷

南北の外患 明も一盛一衰の例にもれず、第六世の英宗より後の明朝は、北は蒙古の遺衆及び南は邊境の海賊の侵入などを被り、北虜南夷といつて、ふるひ恐れた。これら南北の外患は明朝を大いに衰へしめた。

朝鮮の太祖李成柱

明と朝鮮

* 皇紀二〇五二、

後龜山天皇御代、足利義滿の時、西紀一三九二

朝鮮役の影響

* 我が足利義政より義晴の頃まで

王陽明

知行合一の教

山中の賊と心中の賊

⑤ 朝鮮の役 高麗は久しく元に服従してゐたが、元末明初に至り、その國勢漸く衰へた時、李成柱は自立して王位につき、今の京城に都した。これが朝鮮の太祖で、今の李王家の先祖である。その後、豊臣秀吉は國威を海外に揚げやうとして先づ朝鮮に出兵したので、明の神宗(萬曆帝)は大兵を發して朝鮮を援け、反つて大敗し、これより後、明は益々衰へた。

⑥ 明の王陽明 明代の中世に王守仁(陽明と)といふ學者が出て、良知



山中の藤樹の書

の説を唱へ、道は我が心に求むべきことを説き、また知行合一の理を教へた。

「山中の賊を破る

は易く、心中の賊を破るは難しとは王陽明の一名言である。王氏の學は陽明學として世に行はれ、我が中江藤樹熊澤蕃山なども篤く之を信じた。實行力の強い學風であつた。

⑦ 莫臥兒帝國 明朝の起るや、蒙古人の

元朝は支那より逐はれて北方に敗れ退いたけれども、蒙古人のアジアの他の方面に於ける勢力は、侮るべからざるものがあつた。明の初め、第二の成吉思汗ともいふべき帖木兒といふ豪傑があらはれて、中亞及び西亞の大部分を併せ、大國をたてた。

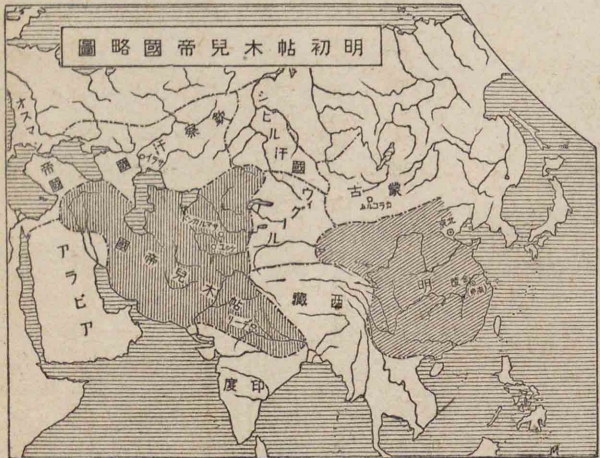
それより、百餘年を経て、その五世の孫バベルは印度に攻め入り、莫臥兒(ち蒙古)の轉

Barbar

Moghal 轉

帖木兒

* 皇紀二一八六、足利義晴の時、明の中世、西紀一五二六



莫臥兒帝國の盛衰

（音）帝國の基をたてた。その孫阿克バルAkbarに至つて、同帝國は益々盛となり、その後全印度を一統したけれども、久しからずして帝國は漸く衰へた。

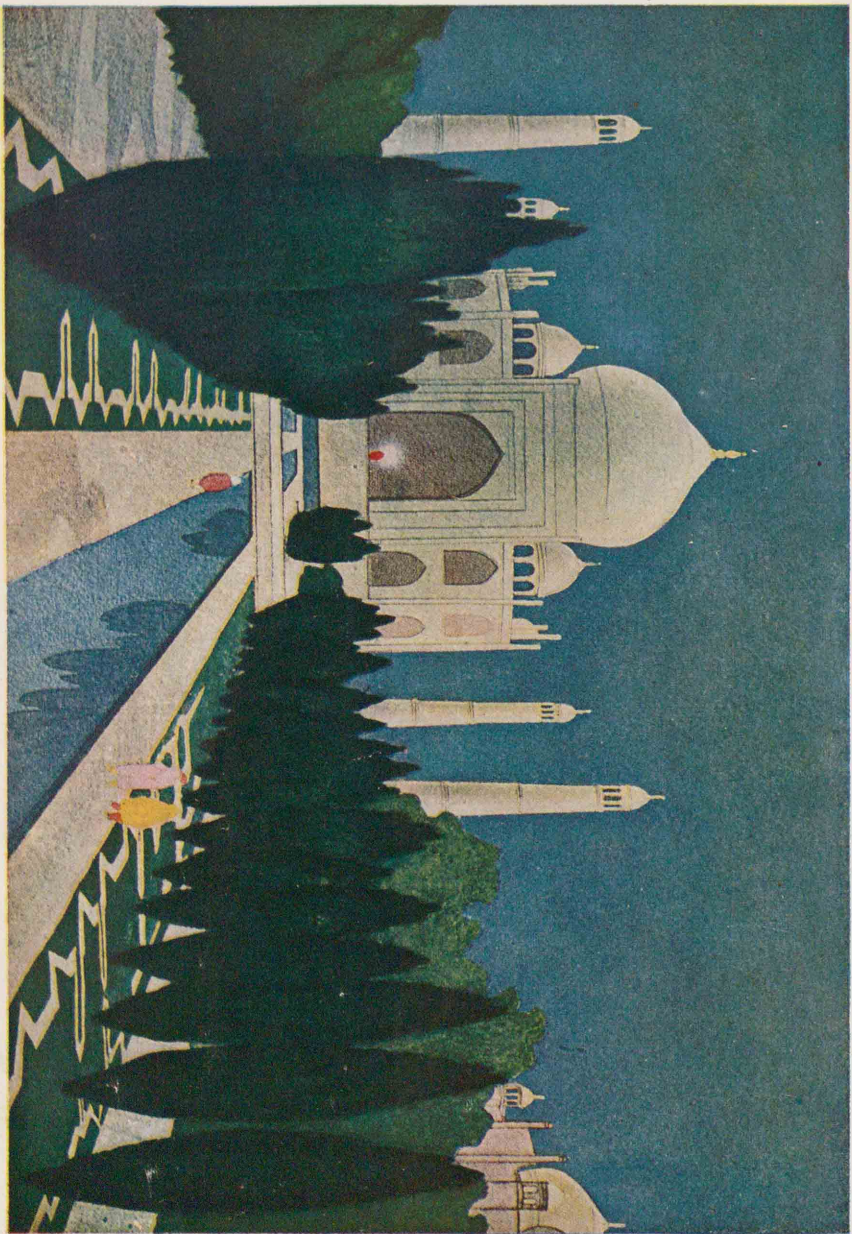
帖木兒大王及び莫臥兒帝の系圖



第九章 清時代

●明朝の滅亡と清朝の興隆 明朝は第八章に記したやうに（六四べ）神宗（萬曆）の頃から大いに疲弊した。その時に當つて、強敵滿洲人が、明の東北に勃興した。その有様は、恰も南宋の衰へた時、蒙古が北方

宋と蒙古
明と滿洲



タージマハル

タジマハール (Taj Mahal)

タジマハールは、アクバル大帝以後の莫臥兒帝國の首府であつたアグラ市附近に在る。アクバルの孫シャージハン及び其皇后の陵廟である。シャージハン時代は印度空前の繁榮な時代として名高く、此陵廟は、白大理石の建築中に、青玉、瑪瑙、珊瑚等の珠玉を交へ入れて、甚だ美麗である。晴天の晝間此處に至るや、日光赫々、白石と相映じ、目を開け難い程である。月夜の觀望は特に美しいさうである。

* 皇紀二二七六、
後水尾天皇御代、徳川家康の薨せし年、西紀一六一六

後金の太祖
* 皇紀二二九六、
明正天皇御代、徳川家光の時

清の國號



ヌ
神宗時
ル
代の滿
ハ
洲の女
チ
眞族の
酋長に

ヌルハチといふ英雄があつた。興京(今奉天省の東邊道内)より起つて、次第に近隣の諸部族を併呑し、自ら帝位についたが、これが後金の太祖である。太祖はついで明と朝鮮の聯合軍を破り、益勢を得、都を今の奉天に遷した。太祖の子太宗は進んで内蒙古を征服し、國號を清シと改め、次に朝鮮



(建創の祖太の清) 殿政大の天奉

清と朝鮮

を攻め降した。しかし朝鮮人は、明朝に好意をもち、清朝に心服しなかつた。

毅宗の殉國

さてまた明は神宗の孫毅宗の世になつて、賊徒が諸方に起り、賊軍はつひに北京に亂入し、毅宗は自殺して國難に殉じ、明は二百七十七年で亡んだ。

世祖の北京遷都と辮髮令

そこで清朝第三世の世祖(太宗)は、都を今の北京に遷し、辮髮の令を下して、滿洲の風俗に従はしめた。

戴き、江南に據つて恢復を圖つたけれども、皆敗れ、清はつひに支那を統一した。

鄭氏の孤忠 明の遺臣中鄭成功が最も名高い。その母は我が平戸の田川氏で、烈女として名高い。成



鄭成功の木像 (臺灣南開山神社)

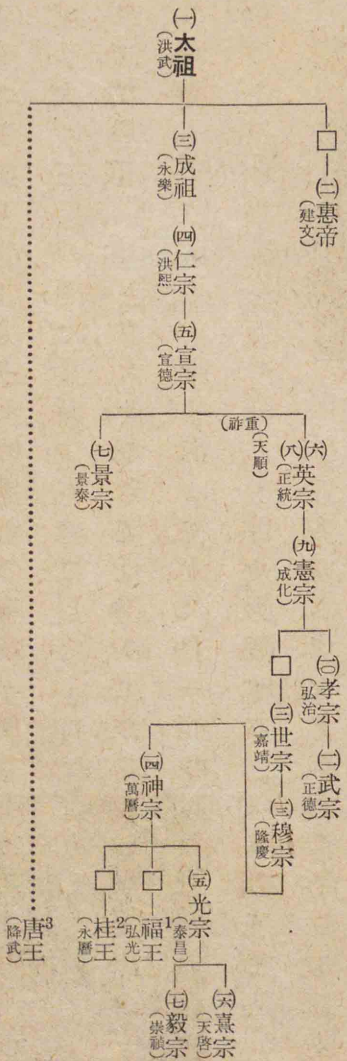
鄭成功義兵を起す

烈女田川氏

功はまづ廈門(福建)に據り、ついで臺灣を占領し、力を明の爲に盡したが、つひにその志を得なかつた。

明の系圖

(括弧の内は年號なり12) 3は明末南方の三王なり

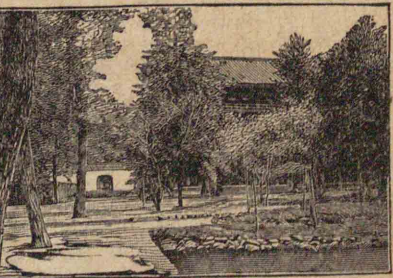


國姓爺

朱舜水及び隱元

鄭成功は明の國姓朱氏を賜はつたので、國姓爺と呼ばれ、我が近松門左衛門の傑作の戯曲「國姓爺合戦」にも、その忠勇を傳へられてゐる。今の臺灣の臺南縣社開山神社は成功を祭つた神社で、後殿にはその母田川氏も祭られてゐる。また明・清革命の際、明人の清に仕ふるを恥じて本邦に歸化したものが多い。中にも朱舜水は徳

川光園の師賓となり、僧隱元は本邦黄檗宗の開祖として、共に名高い。今の東京市本郷區東京帝國大學農學部敷地は舊水戸藩邸で、舜水の病歿した處である。



寺福萬山藥黃治宇

康熙・乾隆二帝の武功

*後西・靈元・東山・中御門四天皇御代、徳川家綱・綱吉・家宣・家繼・吉宗の五代

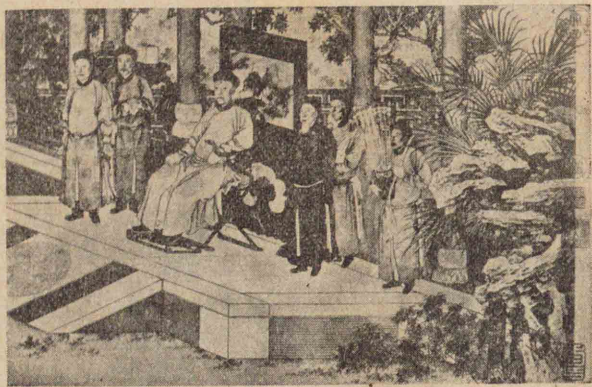
*櫻町・桃園・後櫻町・後桃園・光格五天皇御代、徳川吉宗・家重・家治・家齊の四代



帝熙康祖聖

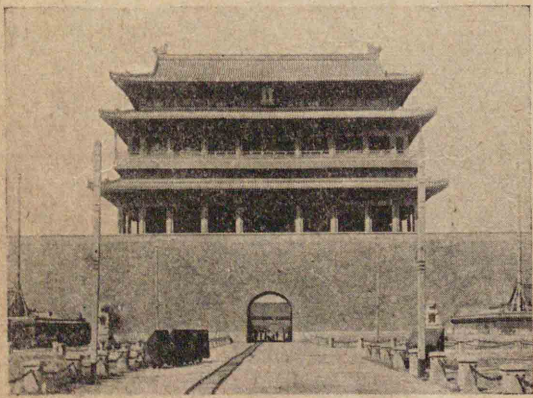
清朝の極盛 清は第三世の世祖の時、略支那を一統し、次の三世の間に益國運を盛にした。特に第四世の聖祖(康熙)と第六世の高宗(乾隆)の世は清朝の極盛時代である。康熙帝は在位六十一年の間、内亂を平げ、臺灣を取り、蒙古を併せ、西藏地方を征服した武功が盛であるのみでなく、學術獎勵の功も多大であつた。その孫乾隆帝もまた在位六十年に及び、天山南北兩路を平げ、バルマ、安南及びシヤム等を降したので、その領地は漢唐二代の盛時にも優るやうになつた。

全盛と尊大



帝隆乾るけ於に廷宮

た。けれどもこれが爲に、支那人を益尊大にし、外國を輕んずる習慣を生ぜしめた。
④清朝の下り坂 清朝は第六世の乾隆帝に至つて、隆盛の極に達し、第七世仁宗(嘉慶)の世は、なほその餘勢によつて、やゝ盛であつたが、その後は漸く所謂下り坂風に衰へて、清朝の末路と



門城京北

學術の進歩

はじめた。それ等の事は、清朝の末路として別にのべようと思ふ。
⑤清の學術 宋代以來の儒者は、哲學的

明末及び清朝の
新學風

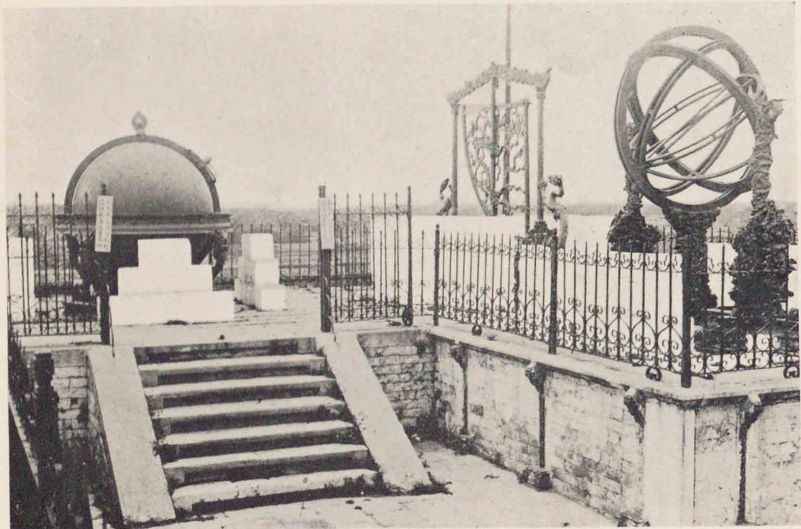
日・支の西洋學
術採用の優劣

理論を主とし、やゝ空論の弊を生じた。明末以後は、その反動として
 古典を緻密精確に研究する考證學風が起り、顧炎武等は新學風の首
 唱となり、清の史學、地理學、文字學、考古學等が大いに發達した。また
 康熙、乾隆の間には、勅撰の大著が少くない。中にも康熙字典の如き
 は、我が國にも廣く行はれて居る。なほまた康熙帝は、西洋人南懷仁
 (原名フエル)を天文臺の副長とし、西洋の學術にも注意した。かくて支
 那近世に於ける西洋學術は、我が國より早く開けたが、その發展應用
 は、つひに本邦に及ばなかつた。

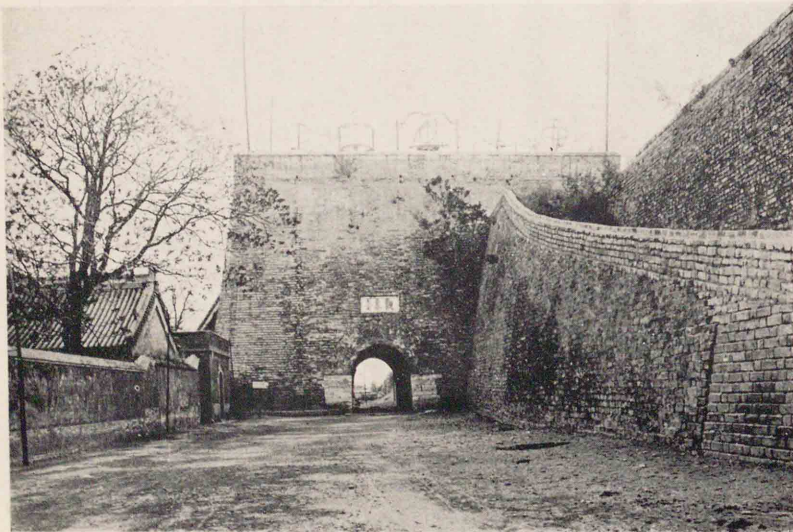
第十章 歐米諸國のアジヤ經略

●西洋人の東漸 明の中頃より、歐洲諸國は競つて、航海植民に従事
 した。中にも葡萄牙人は、莫臥兒帝國の建國より約三十年前に、他國

5WS
 who 人
 where 所
 when 時
 what 事
 why 理
 3PS
 people 人
 place 所
 period 時



械機の臺天文京北



觀外の臺天文京北

北京の觀象臺即ち天文臺は其城壁の上にある。其起源は金時代にさかのぼることが出来、元の世祖の時にも修理改造された。其後清朝時代に至りては、宣教師として支那に渡來した西洋人をして新機械を作らしめて、舊機械に代へた。最近世に至り、明治三十三年、四年の北清事變の時、此天文臺を占領した獨逸軍隊は天文機械の一部を本國獨逸に持ち去つたが、世界大戰後の平和條約によりて北京に送還されたので凡て舊狀に復することとなつた。

* 皇紀二一五八、
後土御門天皇御
代、足利義澄の
時、西紀一四九
八

* 皇紀二二一七、
西紀一五五七

* 皇紀二二〇三、
天文十二年、西
紀一五四三

西班牙人の來航
* 皇紀二二二五、
西紀一五六五

蘭人の成功

* 皇紀二二八四、
徳川家光の時、
西紀一六二四

サヴィエルとマ
テオリッチ

に先んじて始めて阿弗利加を迂回して印度に達した。これより後、その國人は續いて東洋に來り、遂に明の澳門(マカオ)を占領して、支那貿易の根據地とした。葡萄牙人はこれより十數年前に既に我が國にも來航し、久しい間東洋貿易の利を占めてゐた。西班牙人も葡萄牙人について東洋に來航し、フィリッピン群島を占領して、マニラ市を建て、こゝを根據地として我が國にも來た。

和蘭と東洋 和蘭人は前二國にやゝ後れて、東洋に着眼したが、二國人と競争して遂に成功し、ジャバ島にバタヴィヤ市を經營して東洋の根據地とし、我が國とも徳川時代を通じて貿易を行ひ、更に一時は臺灣の一部を占領した。

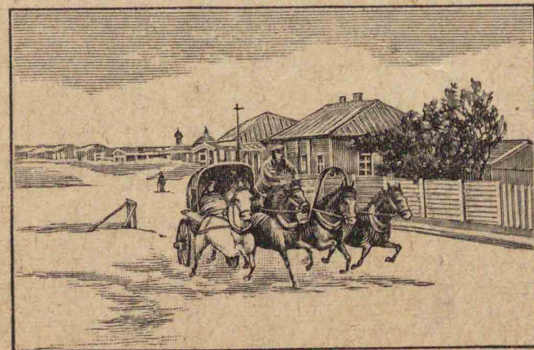
耶蘇教の東傳 西洋人の來航と共に、耶蘇教も亦東洋に傳はり、ジエズイト派のサヴィエルとマテオリッチ(支那名は利瑪竇)は、當時東洋に來た宣教師中最も有名であつた。是等の宣教師は曆法、數學、砲術等に通じ、朝



(左)寶瑪利 (右)啓光徐の明

めた。

④清・露の交渉 元代以來久しく蒙古人の支配に服してゐた露西亞も、明の中世に至つて獨立し、その後次第に東進してシベリヤを經略し、清の初期には東亞に達し、遂に滿洲の北部に入るに及んで、清露間の争ひとなつた。



景風ヤリベシ

廷より信任され、又明の名士の歸依もあつた。諸名士中では徐光啓が最も高く、西洋の新學術の紹介

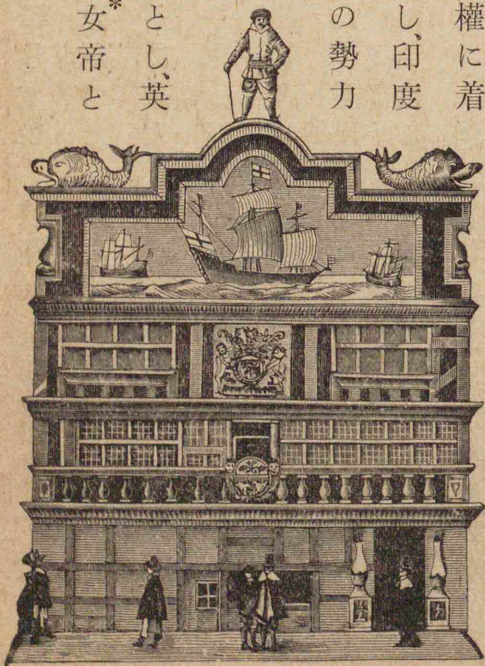
尼布楚條約
*皇紀二三四九、
東山天皇の元祿二年、西紀一六八九

英國の東印度會社設立
*皇紀二二六〇、
御陽成天皇御代、
明の神宗時代、
西紀一六〇〇

莫臥兒帝國の滅亡
*皇紀二五一七、
孝明天皇御代、
西紀一八五七
印度帝國
*明治九年

そこで清の聖祖(康熙)は露國のピーター大帝に交渉し、兩國の使臣は尼布楚(外カルバイ州)に會し、談判の結果、外興安嶺を以て兩國の境界と定め、一時この問題は平靜に歸した。

⑤英領印度 康熙乾隆の全盛時代の既に過ぎ去つた後は、清朝の受難期となり、阿片戦役によつてその幕は切つて落された。これより先き、英吉利人も東洋の利權に着眼して、東印度會社を設立し、印度の侵略に着手し、佛蘭西人の勢力を印度より驅逐し、遂に莫臥兒帝國を滅した。ついで英國は印度を帝國とし、英國女王ヴィクトリヤがその女帝となつた。



(初清末明) 社會度印東國英

阿片の害毒

林則徐阿片を燒

* 皇紀二四九九、
仁孝天皇御代、
西紀一八三九



林權を握つた乾隆時代の頃より、印度の阿片を
則清國に輸入した。これが爲め清人は生命を
徐害し、また經濟的にも多大の損害をうけたの
で、乾隆帝の孫の宣宗(道光)の時、欽差大臣林則

徐は、廣東に於ける英國商人の阿片を燒き棄

て、遂に英人の通商を禁じた。然るに英國は

この處置を不當とし、貿易保護の名を以て、そ

の艦隊は廣東、廈門等を封鎖し、遂に南京に迫

つた。

七 南京條約 此に於て清朝も大いに恐れ

て和を請ひ、英國と南京條約を結んで、償金(千

弗萬)を出し、上海、寧波、廈門、福州、廣東の五港を

* 皇紀二五〇二、
仁孝天皇御代、
天保十三年、西
紀一八四二



(康健) 去過の者煙吸片阿
態狀三の(弱衰) 來未 (惰怠) 在現

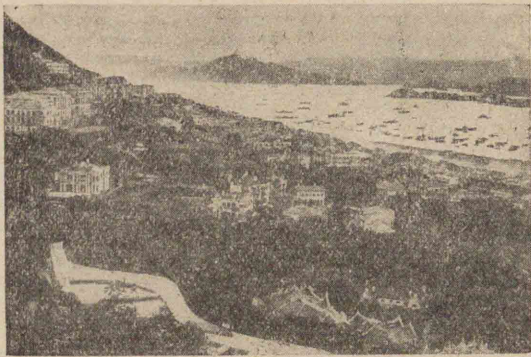
香港の割讓

上海の繁昌

外患と内亂

太平天國

曾國藩等の義勇兵



開き、且つ香港を割讓した。これより後清國
と歐米諸國との間に次第に條約が結ばれ、そ
の關係は愈々密接複雑となり、上海の貿易は大
いに發展した。
八 長髮賊 阿片戰役の外患について起つた
のは、長髮賊の内亂である。清朝が阿片戰役
に敗れたのに乘じて、洪秀全は亂を廣西省に
起し、國を太平天國と號し、耶蘇教を奉じ中國
の復興を唱へ、遂に南京に據つた。これを長

髮賊(剃頭辮髮せざるが故に)の亂といふ。時に清朝の兵力は弱くして賊軍を平ぐ
ること能はず、勤王の名臣曾國藩、李鴻章等は、義勇兵を起して賊軍を
破つたけれども、賊勢未だ衰へなかつた。

九 英佛の侵入 時に廣東の官吏が一英船に入り、有罪の清人を捕へ

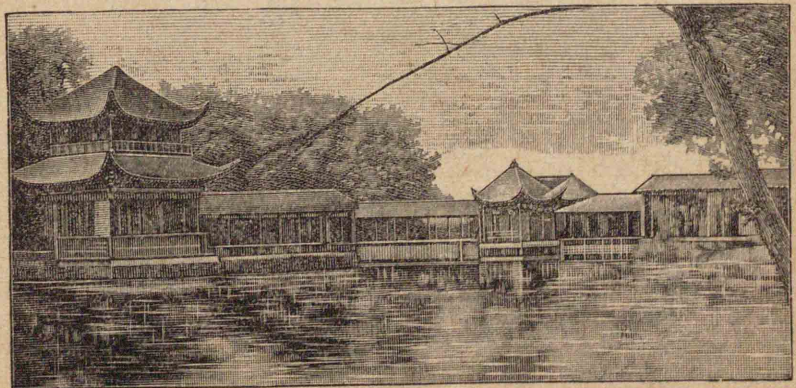
北京條約
*皇紀二五二〇、
孝明天皇御代、
萬延元年、西紀
一八六〇

んとして英人と衝突した。時に佛國の宣教師も廣西に殺されたので、英佛の軍は聯合して遂に北京を陥れた。清朝は遂に和議を請ひ、北京條約を結んで、償金を出し、耶蘇教の布教を許し、牛莊漢口等の港を開いた。

⊕長髮賊の平定 この外患の爲に、内亂の



平定は後、
ゴが會
ドが會
ルが會
ンが會
等益、



會國藩の祠 (縣沙長省南湖)

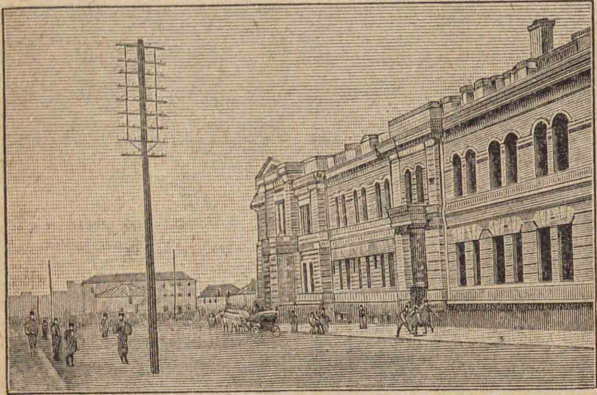
英人ゴルドンの
義勇
戰亂の影響

奮戦し、又英人ゴルドン等官軍を助けたので、賊勢漸く振はず、洪秀全も敗れて自殺し、餘賊もつひに平定された。この内亂は勃發以來十五年も續き、その戰禍は十六省に互り、清の國力は大いに衰へ、外國の

壓迫は益、甚しくなつた。

⊕露國と滿洲 露國東侵の勢は、先に述

べた如く聖祖(康熙)の時一時挫かれたが、その後も常に機會をねらひ、長髮賊の亂に乗じて、黑龍江以北を取り、又英佛聯合軍の北京侵入の時を利用して、烏蘇里江以東の地を獲得し、その南端に浦鹽斯德街港を開いて、極東經略の根據地とした。かくて露國は漸く朝鮮北境を窺はんとする勢を示した。



*皇紀二五二〇、
孝明天皇御代、
萬延元年、西紀
一八六〇
浦鹽斯德の開港
露國と朝鮮

* 明治八年

露國の中央亞細亞經略

* 明治四年、西紀一八七一

* 明治十四年、西紀一八八一

露國の南下と英國の反對
* 明治二十年、西紀一八八七

樺太占領 ついで露國は我が國に交渉して、千島と交換に樺太島を得たので、日本海北岸の地域が露國の領有する所となつた。

伊犁事件 露國は東方侵略と共に、聖祖(康熙)の頃より中央亞細亞の侵略にも着手し、次第に東進して清の西北部の伊犁地方に近づいた。偶同地方に回教徒の亂が起るや、露國はその鎮撫を名として之を占領した。既にして清國はその亂を平げて、伊犁の還附を求めたが、露國は之に應ぜず、談判の後清國は遂に償金を出し、一部の地を割讓してその局を結んだ。かくて尼布楚條約に於て清國が優勢であつた時とは形勢が一變した。

英露衝突 露國は中亞細亞經略の鋒を南に進めて、印度洋に出でんとしたが、英國は勿論之に反對した。然し英國も遂に一步を讓り、境界を議定して、戦を避けた。

佛國と安南 東洋經略について佛蘭西は英露二國に次ぎ、清の初

* 皇紀二五二二、
孝明天皇文久二年、西紀一八六二

* 明治十六年、西紀一八八三

英・露の次に佛蘭西

* 明治十八年、西紀一八八五
佛領印度支那の成立

から安南に着眼し、その王族阮福映を援けて安南を統一せしめ、且つ基督教の布教に努めた。然し安南人は佛人に親しまず、また宣教師を虐待したので、佛國は安南を攻めて、交趾支那の地と償金とを得、ついでカンボヂヤを保護國とした。その後、安南王は佛人の專横に憤慨して戦を開いたが失敗し、遂に東京地方を割き、安南を佛國の保護國として、和議を結んだ。

佛領印度支那 然るに、清國は安南を藩屬國として、和議に異議を唱へ、遂に兩國の戦ひとなつたが、やがて讓りあつて講和し、清國は佛國の東京地方占領を承認した。かくて佛國の政策は實現され、佛領印度支那が成立した。

第十一章 中華民國

● 清朝の末路 本章に於ては、現在の中華民國の成立をのべることに主要の目的であるが、それについては、清朝の末路より説きはじめることを必要とする。清國は阿片戦役以來、外患を被ること既に五十餘年である。最近世に至つては、歐米列強の壓迫は益甚しく、我が國との關係も重大性を加へ、清朝前半の盛運と、後半の衰運とは、非常に相異がある。

● 日清の開戦 明治維新によりて興隆の氣に満ちた我が國は、清國と新に平和の條約を結んだが、臺灣事件が起り、兩國の感情は和合せず、遂に朝鮮に於て衝突した。我が國と朝鮮との國交は、徳川初期以來平和であつて、明治維新の後更に通商條約を結び、その獨立を保護

日本と清國との關係

* 明治四年

* 明治五年

日本と朝鮮

* 明治九年

* 明治二十七年

日清戦争の導火線

開戦

下ノ關係約

* 明治二十八年



李鴻章

するに盡力したが、清國は朝鮮を保護國として國政に干涉し、日清兩國は朝鮮問題について意見の衝突を見た。偶朝鮮に東學黨の亂が起り、日清兩國共に出兵したが、この内亂の處置及び内政改善等に關する我が勸告が清國に拒絶され、且つ清國に誠意が乏しかったので、その年八月遂に開戦した。我が軍は陸に海に連戦連勝し、支那本部を衝かんとする勢を示した。

● 三國干涉 清國はそこで、李鴻章を我が國に遣はし、伊藤博文等と會議し、清國は朝鮮の獨立を認め、我が國に償金を出し、遼東半島と臺灣澎湖列島を割讓し、且つ沙市(湖北)、重慶(四川)、蘇州(江蘇)、杭州(江浙)を開くことを約定した。然るに當時極東侵略に全力を注いでゐた露國は、我が國の遼東半島領有を喜ばず、獨佛兩國と合して、遼東半島の還附を

遼東半島還附

* 明治二十八年

勸告した。我が國は深く「時局の大勢(遼東還附の詔中の字句)」を察し、代償金を受け
て半島を清國に還附した。

④ 列強の壓迫 日清戦役後、列強は清國の弱點を看破し、競うて壓迫

を加へた。佛國は南支那方面の鑛山採掘權を得、露國は滿洲鐵道の

敷設權を得、獨逸は膠州灣(山東省)の租借權を得、ついで、露國は更に旅順

口及び大連灣の二港を、佛國は廣州灣(廣東省)を、英國は威海衛を租借し

た。

⑤ 壓迫の反動 かくて清國の國歩益、困難

となり、心ある清人は大いに憤慨して、改革

自強の說を唱へた。德宗(光緒帝)も康有爲の

說を納れて政治の改新を計つたが、清廷の

舊臣等之を悦ばず、西太后をして政を聽か

しめ、改革黨を除きて、排外保守の勢に逆轉



康有爲

康有爲の改革計畫の失敗

* 明治三十一年

* 明治二十八年
* 明治二十九年
* 明治三十一年
* 明治三十二年
* 明治三十一年

義和團の暴徒

* 明治三十三年

した。既にして山東地方に耶蘇教の撲滅と、外人の排斥とを主旨とした義和團といふ暴徒起り、遂に北京に亂入し、列國の公使館を攻撃した。

こゝに於て、日英米露獨佛墮伊八國の聯合軍は北京に入り、公使館及び居留民を救つて、北京を占領した。時に德宗と西太后は、一時西安(陝西省)に避難し、李鴻章等をして和を講ぜしめ、償金(四億五千萬兩)を出し罪

を謝して局を結んだ。これが所謂北清事件である。

⑥ 韓國の併合 朝鮮は日清戦役の後、我が國の爲に獨立の名義完全

し、國號を韓と改めた。然るに露國は、北

清事件の亂に乗じて滿洲を占領し、韓國

をも威壓せんとしたので、我が國は自國

の安全と東亞の平和の爲に露國と戦つ

た。その結果韓國は我が保護國となり、



初任韓國統監 伊藤博文

日露戦役

* 明治三十八年

* 明治三十年

北清事件

韓國併合
* 明治四十三年八月
清國の覺醒

* 明治四十一年

我が國は統監を京城に駐在せしめた。されどなほ韓國の治安を保ち難い形勢があつたので、韓國は遂にその國を我が帝國に併合し、東洋の平和は永く保障せらるゝやうになつた。

⑦ 清朝の晩年 日露戦役に於ける我が國の勝利の結果を見て、清國は深く新文明の採用と國政改革の急務なるを認め、西太后も滿漢人の融和に注意し、又早く國會を開くべき上諭を發した。既にして徳宗及び西太后相ついで崩じ、三歳の幼天子宣統帝が即位するや、その父醇親王が政を攝し、輿論に従ひ、國會開設期も短縮して、その準備に努めたが、人心は遂に滿洲人の朝廷に満足し



(央中) 王親醇政攝



后太西び及帝緒光

光緒帝及び西太后

- (一) 德宗光緒帝は、其在位三十四年(自明治八年至四十一年)、國家内外多事の時にあたり、天資聰明にして進取の氣象あり、政に勤め民を愛するを本とし、特に其進歩的思想によりて、政治の改革を圖り、大に爲す所あらうとしたが、平素多病、其志を果さずして崩じた。
- (二) 西太后はもと成豐帝妃であつた。同帝の崩後、大約五十年、垂簾の政を聽き、内憂外患、頻に至るの時にあたり、よく人心を收め、人才を統べ、政治家的才智のあつた皇太后として有名である。

なかつた。

八 清帝の退位

これより先き廣東の人孫文(號す逸仙と)は、清朝を倒して、



袁世凱と孫文

漢人の世に復さうとする革命黨を起して宣傳に努め、次第に勢力を加へて來た。時に清朝が鐵道國有政策を斷行するや、人心動搖し、革命黨は兵を武昌に擧げ、假政府を南京に建て、孫文を臨時大總統に推した。清廷は當初討伐隊を出したが成功せず、革命黨は益々振つたので、清廷は内閣總理大臣袁世凱(エンセイカイ)に命じて革命軍と交渉せしめ、宣統帝は皇帝の尊號と年金かくて清朝は二百六十九年にして亡び、支那共和國即ち中華民國の世となつた。

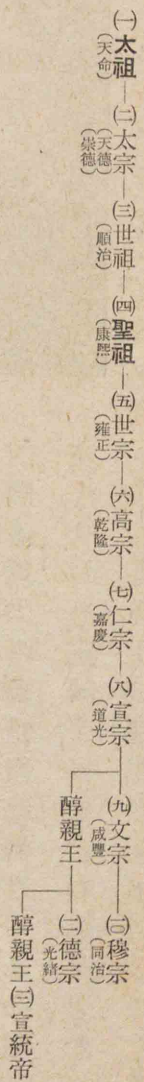
革命黨の擧兵

* 明治四十四年十月

幼帝の退位

* 明治四十五年二月

清の系圖



* 大正二年

中華民國の正式
成立

* 中華民國三年
西紀一九一四

日・獨開戰

* 大正三年八月

膠州灣占領

* 大正四年五月

日支條約

九 中華民國 清帝の退位するや、孫文は辭職し袁世凱は參議院(支那の代表者)に推されて臨時大總統となり、その翌年開かれた第一回民國國會から選舉されて、袁世凱は大總統に黎元洪は副大總統に就任し、中華民國が正式に成立し、列國は之を承認した。

十 日・獨開戰と日支交渉 東洋平和の維持は、我が國外交の大方針である。大正三年七月に世界大戰の起るや、我が國はこの大方針に基づき、獨逸に對して、日本海支那海方面にある艦艇の撤退及び膠州灣租借地の還附を勸告したけれども、應じなかつたので、遂に戰を宣し、膠州灣を占領した。又我が國はこの大方針により翌年日支條約を

第三革命軍

袁氏の悶死

* 大正五年六月

黎元洪就任

張勳と清朝復興

* 大正六年七月

* 大正六年七月

世界大戰參加

* 大正六年八月

* 大正七年十月

結び、遼東半島の租借期限を延長し、南滿洲及び東部蒙古に於ける我が優越權を認めさせ、山東省に於ける獨逸の利權を繼承すること等を承認せしめた。

袁氏失敗 袁世凱は大總統就任後、共和制を廢して、自ら皇帝にならうとした。こゝに於て唐繼堯等は反對して義兵を擧げ、大勢は袁氏に不利となつたので、彼は帝制宣言を撤回し、間もなく憂悶の内に病死した。よつて黎元洪が大總統となり、國內暫く平和となつた。

清帝の復位と世界大戰參加 その後安徽省督軍張勳は北京に入り、武力を以て國會を解散し、一時宣統帝(清朝最後の皇帝)を復位せしめたが、段祺瑞等に討たれて忽ち失敗し、民國は依然存続した。この事變後、黎總統は引責辭職し、馮國璋之に代り、支那も獨逸に對して戰を宣した。次いで馮總統は退職し、徐世昌が新國會より選舉されて大總統となつた。

* 大正六年九月
南北兩政府

* 大正八年二月

* 大正十年四月

●南北對立 先に張勳によつて國會が解散された時、議員の多くは南方に避難して、舊國會の復活を主張し、孫文を大元帥として廣東に軍政府を開き、西南五省(廣東、廣西、雲南、貴州、四川)は之を援け、支那は南北に二分した。その後列國の勧めにより、南北は上海に平和會議を開いたが成功せず、孫文は南方政府の大總統となつた。然し南方政府は内部の軋轢(アツシキ)によつて瓦解した。

* 大正八年一月

●山東問題と華盛頓會議 支那人は大正四年の日支條約に不満であつた故、世界大戰後の巴里媾和會議の際に、日支條約を無視して獨逸より直接に山東の還附を受けんと盡力したが、成功しなかつた。

* 西紀一九二一
華盛頓會議

かくて支那の一部に所謂排日運動が起つた。世界大戰後、列強は切に平和を希ひ、大正十年に日英米佛伊の五大國は、米國の華盛頓(ワシントン)に會し、軍備の制限、太平洋及び極東問題を議して、平和の保障を圖つた。この會議に於て我が國は支那と協議して、山東を還附し、支那は膠州

山東問題解決

* 大正十一年一月

灣を開放し、山東鐵道を我が國より譲り受け、獨逸が採掘權を有してゐた鑛山は、兩國の共同經營に決して、山東問題はこゝに解決を告げた。

* 大正十一年五月

直隸派軍閥

* 大正十二年十月

奉直戰爭

* 大正十三年十一月

孫文の永眠

* 大正十四年三月

段執政退職

* 大正十五年四月

張作霖大元帥となる

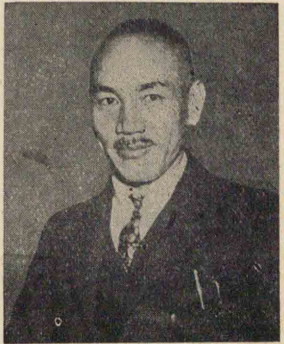
* 昭和二年六月

●多事多難の民國 これ等内外多事の際、大總統徐世昌は、在職四年にして辭職し、黎元洪が代つたが、直隸派軍閥の壓迫を受け、在職一年にして辭職し、直隸派の首領曹錕(サウコン)がこれに代つた。時に奉天に據つて滿洲を勢力範圍としてゐる張作霖は直隸派と兩立せず、大正十三年九月に至り、張作霖と直隸派の吳佩孚(ウペイフ)は長城方面に開戦し、所謂奉直戰爭となつた。その結果、吳佩孚は敗れ、曹錕は幽閉され、段祺瑞が臨時執政となつた。段氏は時局收拾のため、南方の孫文等の有力者を集め、善後策を講じようとしたが、孫文は病死し、また張作霖(チヤウリン)馮玉祥(フンジュウ)（直隸派の部將）吳佩孚等の間に紛争が續き、段執政も執政退職の已むなきに至つた。かくて張作霖は、北京に中華民國軍政府を建て、自ら大

三民主義

蔣介石と中華民
國の國民政府成
立

*昭和二年四月

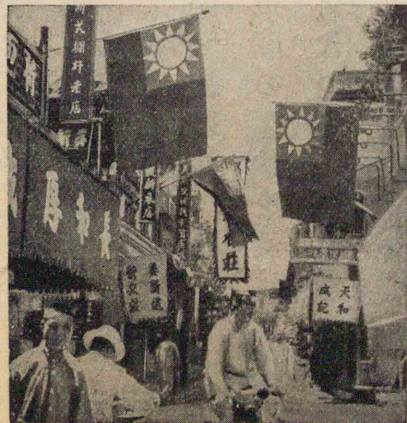


元帥となつた。

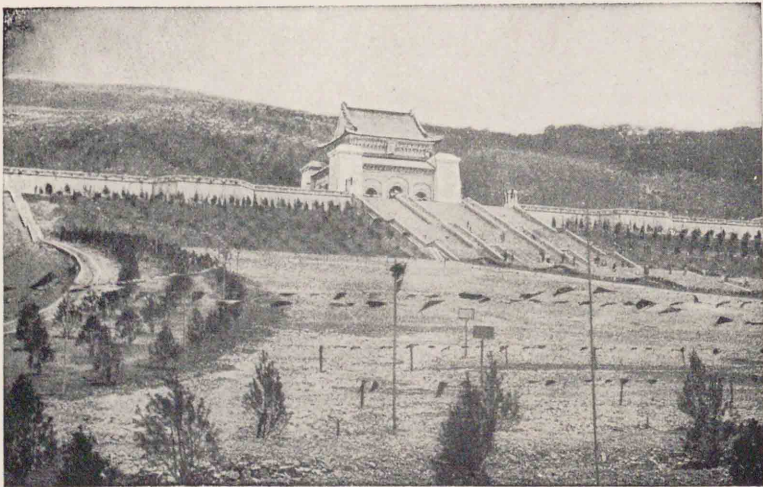
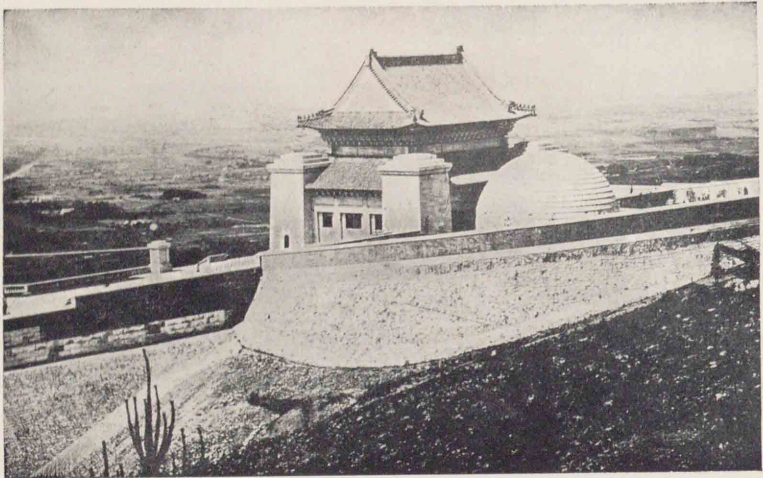
蔣 國民政府の成立 孫文の死後、その主唱し
介た民族、民権、民生の三民主義を宣傳して、人心
石の共鳴を得たる南方の總司令蔣介石は、廣東
を出發して北伐軍を揚子江流域に進め、南京

に中華民國の國民政府を建てた。蔣介石は更に北伐を續け、北方の
張作霖は漸く不利となつた。よつて張
作霖は、北京より退いて奉天に入らんと
して不慮の死を遂げ、その子張學良は東
三省保安總司令となつたが、民國統一の
ため國民政府に服従することとなつた。

三民主義 民族主義とは外に對して民族の平
等、民権主義とは内にありて人民の政治的平等



旗紅地滿日白天青の府政民國



(號の文孫は山中)陵山中の外城京南
景全陵山中(下) 所安奉樞靈(上)

民生主義とは人民の生活の安全平等を、それなく期するものである。

⊕ **外蒙古と西藏** 民國は統一したけれども、完全なる統一でない。外蒙古と西藏とは、さきに清朝の亡びた後、支那本部より離れ去らうとし、露西亞は外蒙古を、英國は西藏を後援して、外蒙と西藏の二大方面は、殆んど半獨立したやうになつた。

第十二章 滿洲帝國

● **滿洲事變の發生** 日露戰役の後、我が國は巨額の資本を用ひ、多大の努力を以て滿洲の開発に力めた。これが爲に文化の恩澤は漸く滿洲諸方面に及び、支那は動亂相つぐも、滿洲は平和の別天地のやうであつた。然るに支那人の一部は大正四年の日支條約締結以來、我が國を誤解して、しばしば、排日運動を行つたが、張學良が滿洲の支配

滿洲は平和の別
天地

者となるや、我が特殊權益を侵害し、我が國の經濟的基礎をくつがへさうとした。

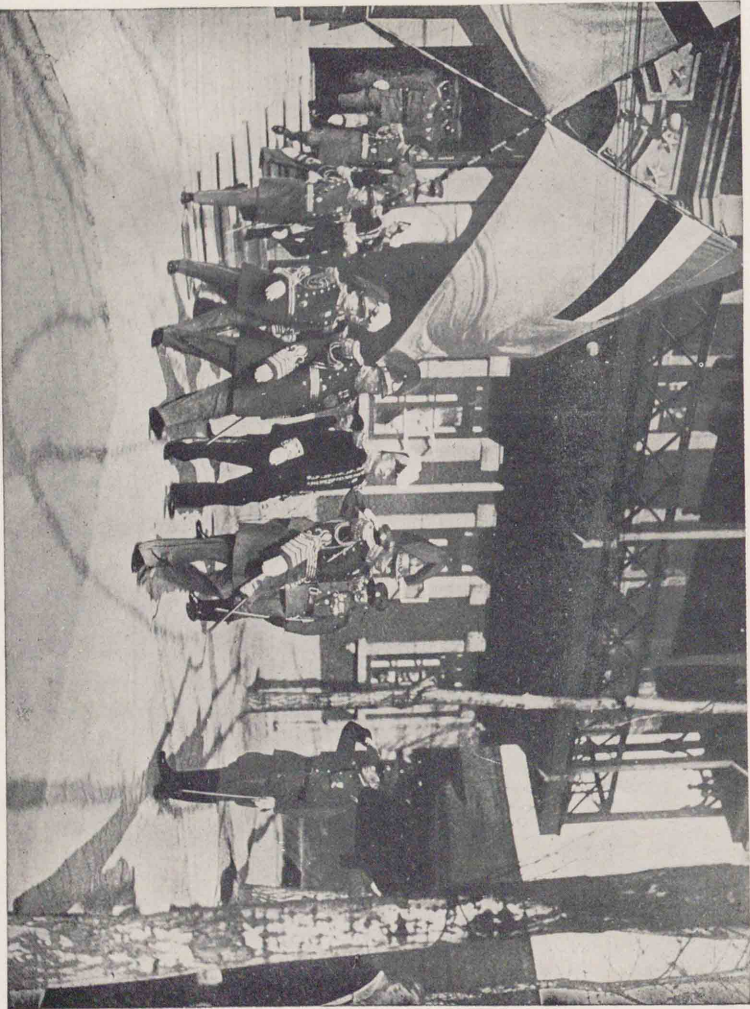
滿洲事變の突發

かくて昭和六年九月十八日、張學良の兵が滿鐵線路を爆破するや、我が皇軍は自衛のため斷然立つて張學良の軍と戦ひ、南滿の要地を占領して、皇軍の向ふ所敵なき有様となつた。

この間南京の國民政府は、歐洲諸國によつて國際聯盟に於ける我が國の地位を不利にしようと試みたが、正義によつて行動する我が國は少しも動じなかつた。

● 滿洲國の成立と承認 滿洲三千萬の人民は、久しく張氏父子の壓制に苦んでゐたが、張學良の勢力が完全に滿洲より一掃されたので、獨立の機運はこゝに熟し、さきに退位した宣統帝を執政に推戴し、東北四省を合して、新に滿洲國を建て、昭和七年に大同といふ年號を定め、新京(もとの長春)を首府として、新國家は洋々たる新生の第一歩をふみ

溥儀執政推戴
滿洲國の建設
大同元年は昭和
七年に當る



帝皇國滿洲の出退御りよ場式れらせさへ終を式極登

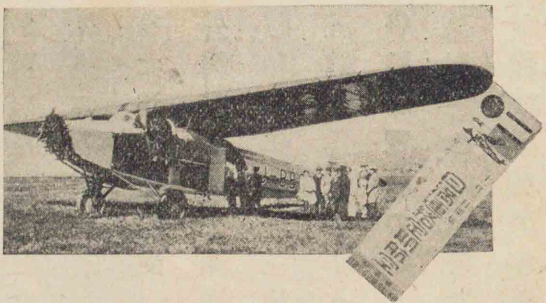
大同三年（昭和九年）三月一日、神嚴極まりなき郊祭の御儀を終へさせられた満洲國新皇帝は、その日正午から宮廷府内奥の勤民樓に於て登極の御儀を行はせられた。新皇帝には新たに御制定になつた大總帥服を召されて英姿颯爽として、我が菱刈大使、鄭國務總理大臣以下大官重臣の奉迎裡に式場に臨御、嚴かに玉座につかせられ詔書に御璽を鈴し給ひ、御聲朗らかに三千萬民衆に賜ふ詔書を宣誥せられ、鄭總理謹んで賀詞を奏上し、高らかに皇帝萬歳を三唱、全員これに和して御式を終へ、新皇帝には天機麗しく入御、かくて満洲建國史を飾る登極の御儀はめでたく終へさせられた。寫眞は登極式を終へさせられて式場より御退出の新皇帝陛下

（國際寫眞情報滿洲國帝政記念號に據る）

出したのである。

⑤ 滿洲新帝國 その後、滿洲國はいよく健全に發展し、大同三年（昭和九年）三月、帝制を採用し、執政

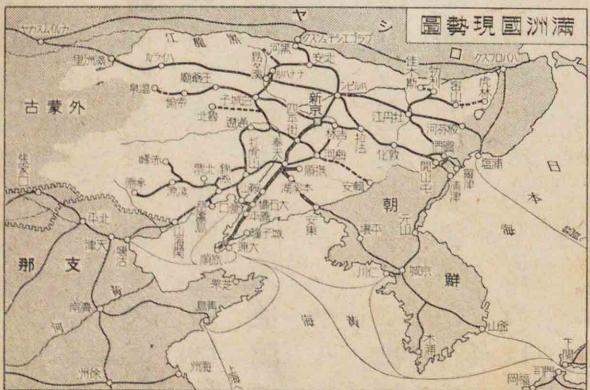
日は新に滿洲國皇帝と旅なり、康徳といふ新年號をたて、その前途の榮えはますく、希望に充ち満ちて居るやうである。



滿洲國帝制の採用と新年號

* 昭和十年四月二日新皇御出發同二十七日御歸還外國皇帝最初の御訪日

④ 滿洲國皇帝陛下御訪日 滿洲國皇帝陛下には、建國以來の善隣日本の援助に感激され、御身親ら御訪日の思召深かつたが、昭和十年四月に至り、それが實現された。御



歸還後、日滿一心一體の大詔も發布されて、日滿不可分の關係はいよ
いよ強化された。

⑤ 駐日滿洲國大使館の成立 日本は滿洲國に對し、初めより大使を
派遣してゐたが、滿洲國は日本公使館を置いてゐた。建國の際準備
が至らなかつた爲である。昭和十年五月に至り、いよく、大使館に
昇格の事が確定した。

⑥ 北滿鐵道讓受 ソヴェト政府から北滿鐵道の讓渡を申出で、我が
外務省は之を滿洲國に傳へ、滿ソ兩國代表は、東京に於て會議を行ひ、
昭和八年以後、三箇年に互る交渉會議の結果、つひに成功したのは、滿
洲國の爲に賀すべきことである。

⑦ 國際電話の始 國際電話は、現代の國交上に重要な意義をもつて
ゐる。この國際電話は今や歐米諸國の外、比律賓、蘭領印度までも、我
が國に居ながら通話し得る現狀であるが、昭和九年八月二日、滿洲國

*昭和十年三月二
十三日、滿ソ兩
國代表正式調印

日滿通話が國際
電話の始

との通話開始を以て國際電話の始とするものである。日滿兩國の
親密な關係は、この一事によつても之をうかがひ得られる。

第十三章 現代の東洋

安内當外



蔣介石塑像(正面と全身側面)
現代支那の名彫塑家劉開渠
の近作で傑作の評がある

● 支那の現狀 中華民
國は、今や南京を首府と
し、蔣介石を中心勢力と
して統治されてゐる。
内外ともに多事多難の
やうであるが、蔣氏等は
内を安んじて外に當る
の方針を立て、教育・軍備

新生活運動

愛國救國の念

産業の振興をはかり、又新生活運動を起して、禮義廉恥の道德を本とし、日常の生活を合理化せしむることを奨励し、國家全體として、その内容が漸く充實しつゝあり、道路の改善、交通の便利、特に飛行機の利用など頗る見るべきものあり、一般國民も愛國救國の念に自覺しつゝありといふ。

思想・學術界の近狀

思想界學術界の近狀を一言すれば、或は黎明期的思想あり、或は新文化的運動あり、或は新舊思想の對立などがある。近代の學者としては、上にのべた康有爲の外、梁啓超、羅振玉、胡適などが有名である。また高等教育も普通教育も發達しつゝある。

② 支那の古と今 あゝ、支那は萬里國土を闢き、世を閱すること幾千年、文化早く開け、聖賢英雄も多く出た。試みに世界の歴史を見れば、盛衰強弱、皆それぐ原因がある。如何に地廣く人衆しとて、徳なく力なければ、如何して治を致し盛を望むことが出來よう。支那は今

特に大賢偉人を要する支那

や特に大賢偉人を要してゐる。誰かよく支那をして世界列國ととも、平和隆昌ならしむるであらうか。

日・支國交の躍進

③ 日・支大使館の成立 日本と支那との關係も、専ら親善を旨とし、從來相互に公使を派遣して居たが、昭和十年六月に至り、日・支兩國共に全權大使を派遣することとなり、日・支兩國の國交に一大躍進を實現するやうになつた。

萬里の長城の昔と今

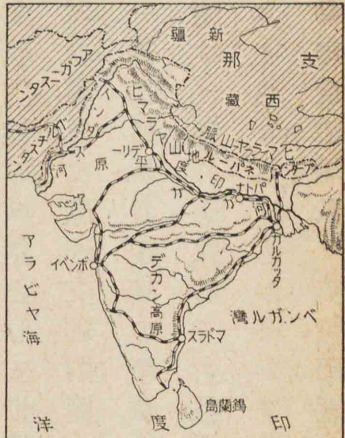
④ 長城の今昔 萬里の長城は、秦・漢以來二千餘年の間、支那にとつて北狄防禦の城堡として世界史上にも名高いものであつたが、今や長城の東部は滿洲支那兩國の境界線となり、長城に接して居る北支の一部には、親日親滿の平和的情勢が次第に高まりつゝあることは注意すべきことにして、古往今來、歴史の流れの力の偉大について考へさせられることが多い。

歴史の流れの力

*西紀一九二一

⑤ 印度の現狀 英領印度に於ては、明治四十四年印度總督政廳所在

ガンディー



印度略圖

日・暹親善

して印度内の大問題となつた。
暹羅の現狀 暹羅は東洋に於ける獨立國の一つである。この國は近年までは專制君主國であつたが、昭和七年十二月に至り、恆久憲法を發布し、立憲君主國となり、その後同國政府はますます力



印度總督府所在地デリー街市

地をカルカタよりデリーに遷し、益々實なる統治を行ふことに努めてゐる。然し大約三十年前頃より一部人士の間、自治及び國産使用の説を唱ふるものあり、ガンディーがこの運動を指導

英露佛米葡諸國と東洋



印度の二人偉人 (詩人) ルーゴタ (實際運動家) - デンガ

國の寶庫とよばれ、香港、新嘉坡、アデン等の土地は亞歐兩大陸に跨り、シベリヤ及び中亞方面に於ける勢力は決して侮るべからず。佛國は印度支那を領有し、米國も東洋に着眼し、葡萄牙の如きも、支那に於て澳門、印

度に於てゴア、ダマン、ヂウを領有するなど、歐米諸國の東洋に於ける政治・軍事・經濟上の勢力は全體として頗る盛であるといふ現狀に對しては、我等も常に注意しておくべきことと思ふ。

第十四章 東洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟

我等の覺悟 東洋の現狀、大體このやうな時に當つて、東洋に於ける我が國の使命については、我等國民の大いに自覺し、かつ大いに注意すべきである。

近世の西洋人が、その大きな勢力を以て東洋諸國に進出し來つた間に、我が日本は、内に益、制度文物の進歩發展をはかるとともに、外は西洋の強大國であるロシアの大軍を撃破し、また韓國を併合して、東洋平和の爲に盡力し、更に進んで世界大戰に参加して、世界平和の爲に

内外の盡力

東洋の主要國

忠君愛國の至誠

も貢獻したことなどによつて、我が國の國際的地位は大いに高まり、その領土は必ずしも大きくはないが、少くとも今や東洋の主要國たる名實を完全にもつこととなつた。よつて、我等國民は益、自重自奮して、忠君愛國の至誠をつくし、以て國力の發展を期さなければならぬ。而して中華民國や印度は、我が國と共にアジア洲に在り、その早く開けた文化は多く我が國にも傳はつて、我が國の道德・宗教・制度・學術その他の文物の進歩發展に貢獻することの多大であつたことを回顧すれば、その現狀に對して無關心であり得ないばかりでなく、中華民國や印度等の國情の安定と否とは、實に東洋全局の平和に關係する所が深く、その間に於ける我が國の地位の重且つ大であることを思へば、我等は心から中華民國や印度等の幸福・安全を希望し、共存共榮の實を擧げたいと切望する。しかも、これはやがて又西洋諸國の爲にも、世界人類の爲にも貢獻し得る最大義務の一つであるの

最大義務の一

である。

中等教育 新編東洋史終

上古史摘要年表

(本系の左傍に括弧を附して、匈奴と記せるは、匈奴は秦より後漢に互り、史上にあらはれたる事を示すものなり)

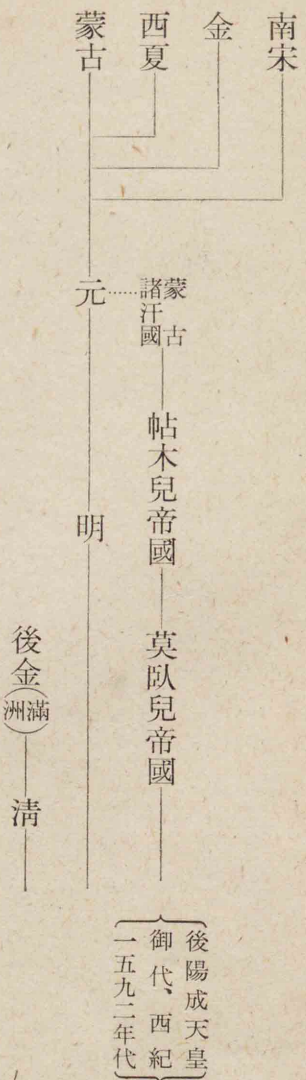
(大體第一章より第三章に至るまで)

太古…黄帝…帝堯…帝舜…夏…殷…周…秦…前漢…新…後漢
匈奴

年	皇紀代	西紀	重要事蹟	年	皇紀代	西紀	重要事蹟
神武	前	二七〇〇頃	黄帝君臨	孝元	皇紀	四五	秦亡ぶ。秦の時文字の改良及び筆の精製あり
綏靖	前	二四〇〇頃	帝堯即位	崇神	皇紀	四九	項羽自殺、漢の高祖の天下統一統
懿德	前	二三〇〇頃	帝舜即位	垂仁	皇紀	一七	衛滿古朝鮮王となる
同	前	二一〇〇頃	夏興る	同	皇紀	一七	漢文帝即位元年
同	前	二〇〇〇頃	夏亡び殷興る	同	皇紀	一四	漢武帝即位元年
同	前	一七〇〇頃	殷亡び周興る	同	皇紀	一三	張騫西域より還る。東西文物の交換漸く起る
同	前	一六〇〇頃	殷の箕子古朝鮮の王となる	同	皇紀	一〇	武帝古朝鮮を平ぐ
同	前	一五〇〇頃	周の東遷始まる	同	皇紀	九	司馬遷の史記成る
同	前	一三〇〇頃	齊の桓公の覇業全盛	同	皇紀	九	新羅の建國
同	前	一〇〇〇頃	孔子生まる	同	皇紀	七	高句麗の建國
同	前	七〇〇頃	孔子死す	同	皇紀	六	百濟の建國
同	前	四〇〇頃	釋迦死す	同	皇紀	六	王莽の篡立
同	前	三〇〇頃	孟子生まる	同	皇紀	八	後漢の光武帝即位元年
孝安	前	二七〇頃	阿育王マガダ國王となる	同	皇紀	四	大月氏のカニシカ王即位
孝靈	前	二五〇頃	周亡ぶ	同	皇紀	三	佛敎始めて支那に傳來す
同	前	二三〇頃	秦の天下統一統	同	皇紀	二	班超西域都護となる
同	前	二二〇頃	秦の蒙恬匈奴を征す。長城増築起工	同	皇紀	二	赤壁の戰
同	前	二〇〇頃		同	皇紀	二	魏の曹丕立して後漢亡ぶ。後漢の時紙の發明あり

近古史摘要年表

(大體第七章より第八章に至るまで)



年	皇紀	西紀	重	要	事	蹟
同	一八六	一三〇	蒙古の太祖(成吉思汗)即位元年			
同	一八四	一二八	蒙古軍阿羅思に侵入す			
同	一八四	一二八	金の滅亡(ロシア)			
同	一八六	一三〇	拔都の西征			
同	一八〇	一二四	元の世祖即位元年			
同	一五三	一〇七	蒙古國號をたてて元といふ			
同	一五三	一〇七	マルコポーロ元に来る			
同	一五九	一〇三	南宋亡ぶ			
同	一五九	一〇三	元軍我が國に入寇して大敗す(弘安の役)			
同	三三〇	二八四	明興り元亡ぶ。明の太祖即位元年			
同	三二九	二八三	帖木兒中亞を平定す			
同	三二九	二八三	朝鮮の太祖(李成桂)即位元年			
同	三〇三	二五七	明の成祖(永樂帝)即位			
同	二〇五	一五九	鄭和の遠洋航海			
同	二〇六	一六〇	バベル莫臥兒帝國を興す			
同	二〇六	一六〇	明の王陽明死す			
同	一五〇	一〇四	此頃韃靼、明に入寇す			
同	一五〇	一〇四	我が國朝鮮をうつ			

近世史摘要年表

(大體第九章より第十四章に至るまで)

後土御門天皇朝
御代、西紀清
一四〇〇年の末

朝鮮

韓

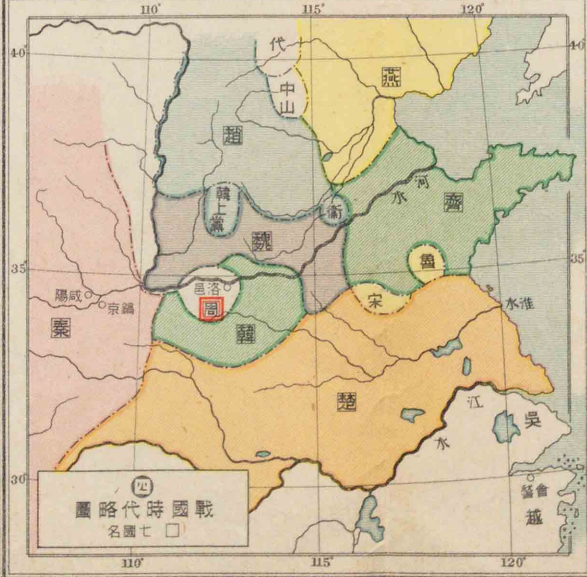
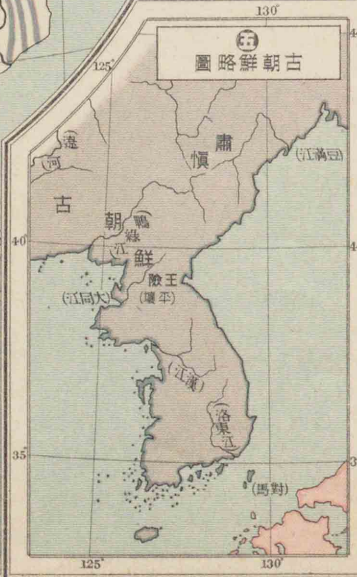
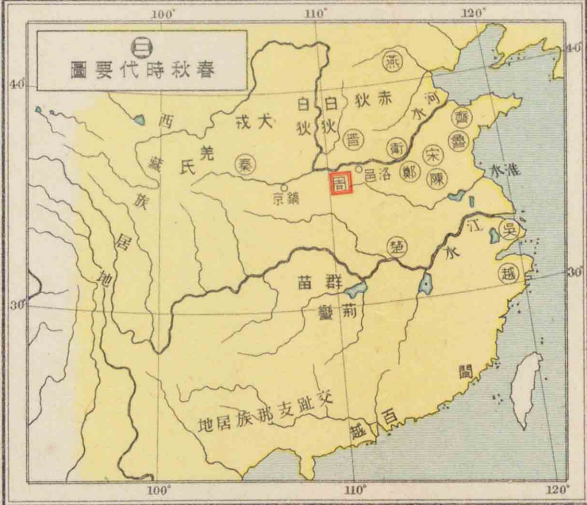
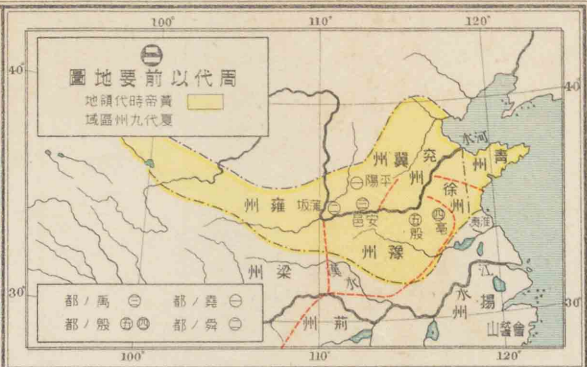
併大日本帝國
併中華民國
併現

莫臥兒帝國 — 英吉利
併

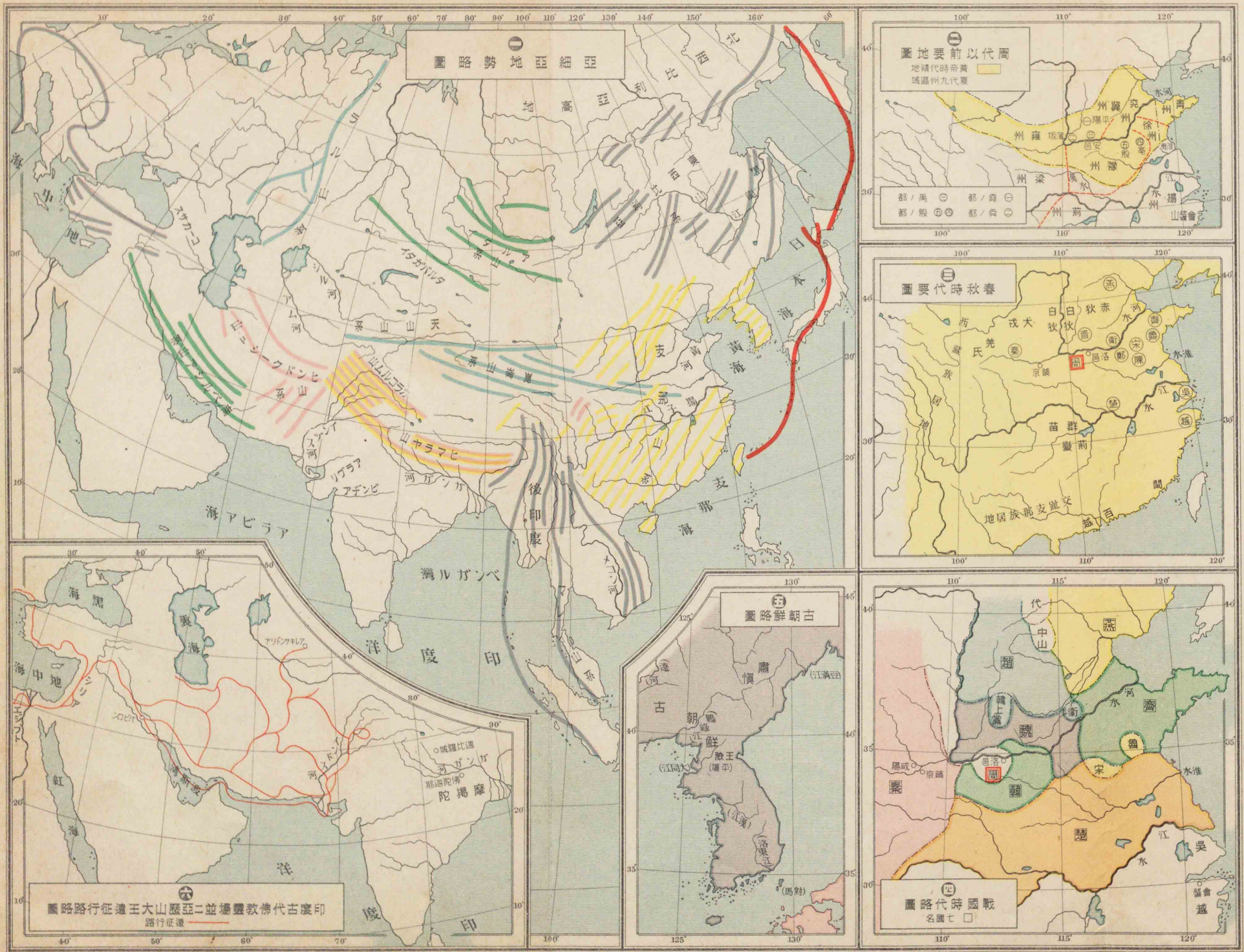
滿洲帝國
代

年	皇紀	西紀	重要事蹟	年	皇紀	西紀	重要事蹟
後土御門	三二九	一四九	葡萄牙人印度に達す	明治四	二五五	一八一	清・露の伊犁問題定る
足利義澄	三三〇	一五〇	葡萄牙人澳門に據る	同二〇	二五七	一八七	アフガニスタン方面の英・露境界問題定る
後奈良	三三二	一五二	西班牙人フィリピン群島を占領す	同二七	二五四	一八四	日・清戦役起る
同義輝	三三三	一五三	伊太利人利瑪竇支那に來る	同二八	二五五	一八五	日・清下ノ關係約成る
正親町	三三四	一五四	滿洲のヌルハチ(清の太祖)兵を起す	同三〇	二五七	一八七	朝鮮國號を韓と改む
織田信長	三三五	一五五	英人東印度會社を建つ	同三一	二五八	一八八	獨・露・英の三國清國の港灣を借る
同	三三六	一五六	滿洲のヌルハチ後金の皇帝と稱す	同三二	二五九	一八九	佛國の廣州灣租借○清國改革派の失敗
後陽成	三三七	一五七	蘭人瓜哇に據る	同三三	二六〇	一九〇	義和團の亂○東西八列國の北京占領○露國滿洲を占領す
豐臣秀頼	三三八	一五八	蘭人臺灣に據る	同三四	二六一	一九一	清・列國と和し北清事件局を結ぶ
後水尾	三三九	一五九	後金國號を清と改む	同三七	二六四	一九四	日・露戦役起る
徳川秀忠	三四〇	一六〇	清の太宗朝鮮を降す	同三八	二六五	一九五	日・露の講和條約成る○日・韓協約成り始めて統監府を韓國に置く
同	三四一	一六一	明の鄭成功臺灣に據る	同三九	二六六	一九六	清國立憲政體採用の上諭發布
後光明	三四二	一六二	清の聖祖康熙元年	同四一	二六八	一九八	清の徳宗光緒帝及び西太后の崩殂
同	三四三	一六三	臺灣清の有となる	同四三	二七〇	一九〇	○清の宣統帝即位
同	三四四	一六四	清・露二國の尼布楚條約締結	同四四	二七一	一九一	日本の韓國併合
同	三四五	一六五	外蒙古・青海等清の有となる	同四五	二七二	一九二	支那の革命戦争起る
同	三四六	一六六	清、西藏を平ぐ	同四六	二七三	一九三	清の滅亡
中御門	三四七	一六七	清の高宗天山南北路を平定す	大正二	二七五	一九三	中華民國正式成立列國承認
吉宗	三四八	一六八	暹羅、清の高宗に朝貢す	同三	二七六	一九四	日・獨開戦
同	三四九	一六九	阿片戦役起る	同四	二七七	一九五	日・支條約締結
同	三五一	一七一	清・英二國の南京條約締結	同五	二七八	一九六	袁總統死し黎元洪之に代る
同	三五二	一七二	長髮賊起る	同六	二七九	一九七	馮國璋大總統となる
同	三五三	一七三	莫臥兒帝國亡ぶ	同七	二八〇	一九八	徐世昌大總統となる
同	三五四	一七四	露國黒龍江北を取る	同八	二八一	一九九	孫文南方政府の大總統となる
同	三五五	一七五	清と英・佛二國の北京條約締結○露國烏蘇里江東を取る	同九	二八二	一九〇	山東問題解決す
同	三五六	一七六	佛國交趾支那を得	昭和二	二八四	一九二	曹錕大總統となる
同	三五七	一七八	朝鮮王李熙(後の李太王)即位元年○長髮賊の亂平ぐ	同三	二八五	一九三	奉直戦争起る○段祺瑞臨時執政となる
同	三五八	一七九	露國樺太を得	同四	二八六	一九四	段執政退職す
同	三五九	一八〇	日・韓通商條約成る	同五	二八七	一九五	蔣介石の北伐軍起る
同	三六〇	一八一	英國女皇印度女皇を兼ね	同六	二八八	一九六	國民政府南京に成立す
同	三六一	一八二	崇厚露國と伊犁還付條約を決す	同七	二八九	一九七	滿洲國我が國より承認さる
同	三六二	一八三		同八	二九〇	一九八	滿洲國帝制を實現し康徳元年と改む
同	三六三	一八四		同九	二九一	一九九	滿洲帝國皇帝日本御來訪
同	三六四	一八五		同一〇	二九二	一九〇	北滿鐵道讓渡
同	三六五	一八六		同一一	二九三	一九一	日・支大使館成立
同	三六六	一八七		同一二	二九四	一九二	支那事變起る

圖一第



第一圖



① 國路勢底臣舊臣

② 圖地要前以代周
地朝代時帝黃
域區州九代夏

部/禹 部/舜 部/禹 部/舜
部/殷 部/周 部/殷 部/周

③ 圖要代時秋春

④ 國路雜朝古

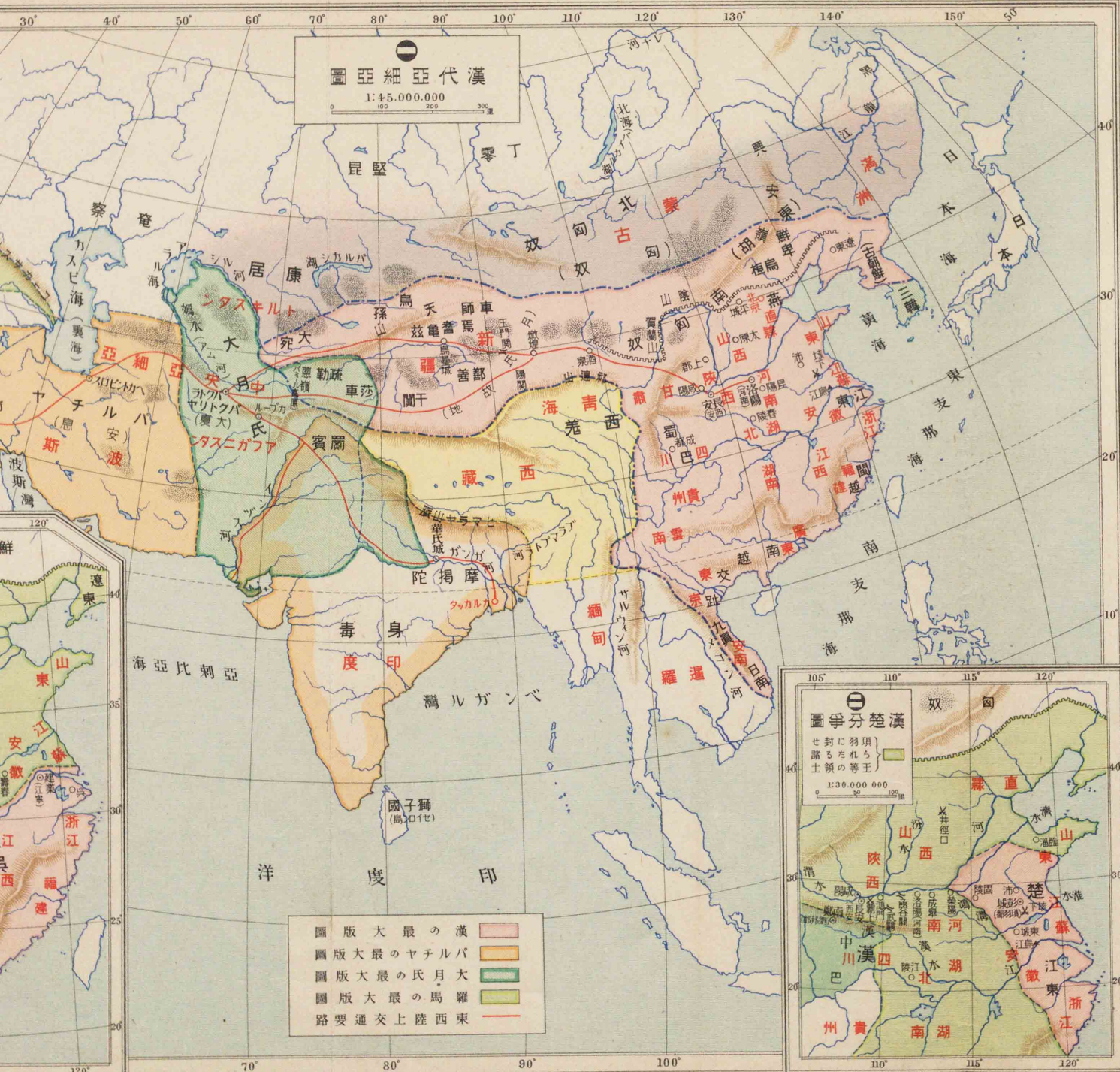
⑤ 圖路代時國戰
名國七

⑥ 國路路行征邊王大山歷亞二並場靈教佛代古廣印
路行征邊

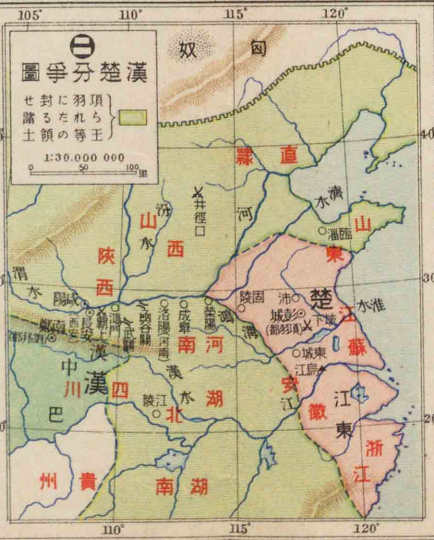
圖二第

圖亞細亞代漢

1:45,000,000



- 漢の最大版圖
- パルティアの最大版圖
- 大月氏の最大版圖
- 羅馬の最大版圖
- 東西陸上交通要路

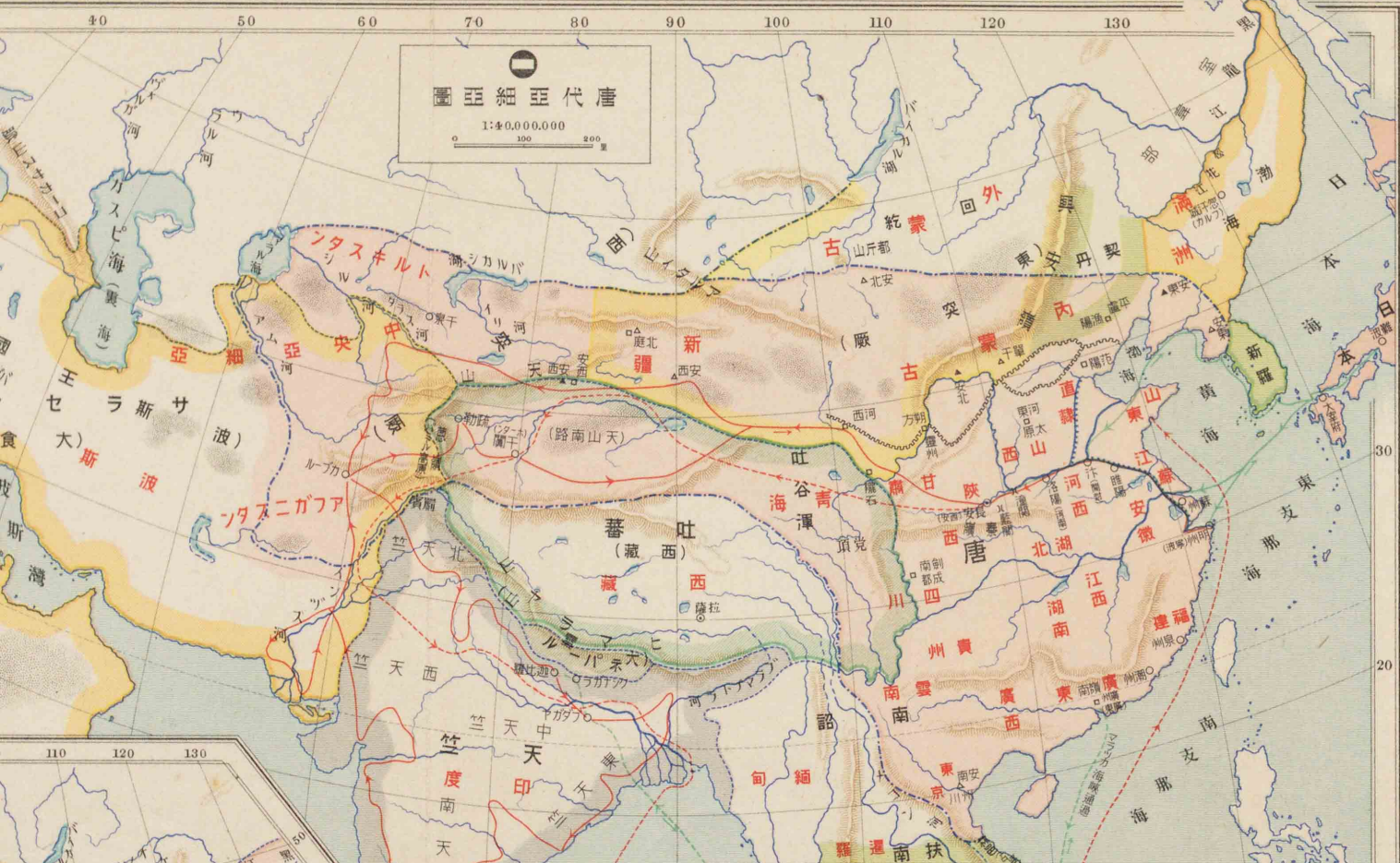


- 漢楚分爭圖
- 項羽に封せられたる諸王の領土

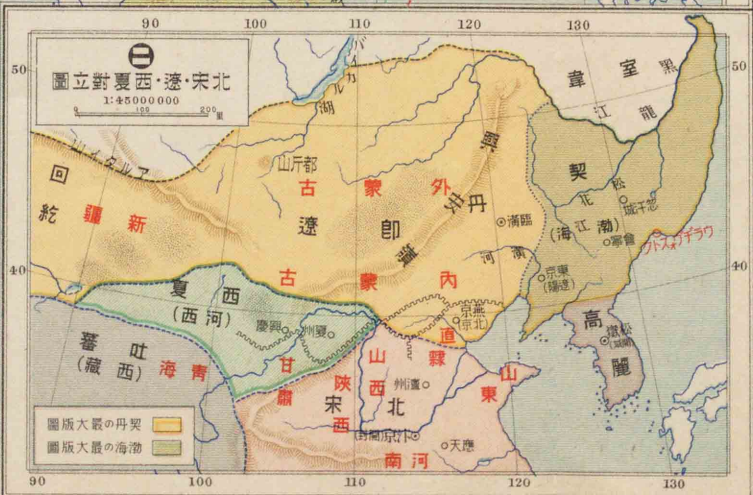
圖二第



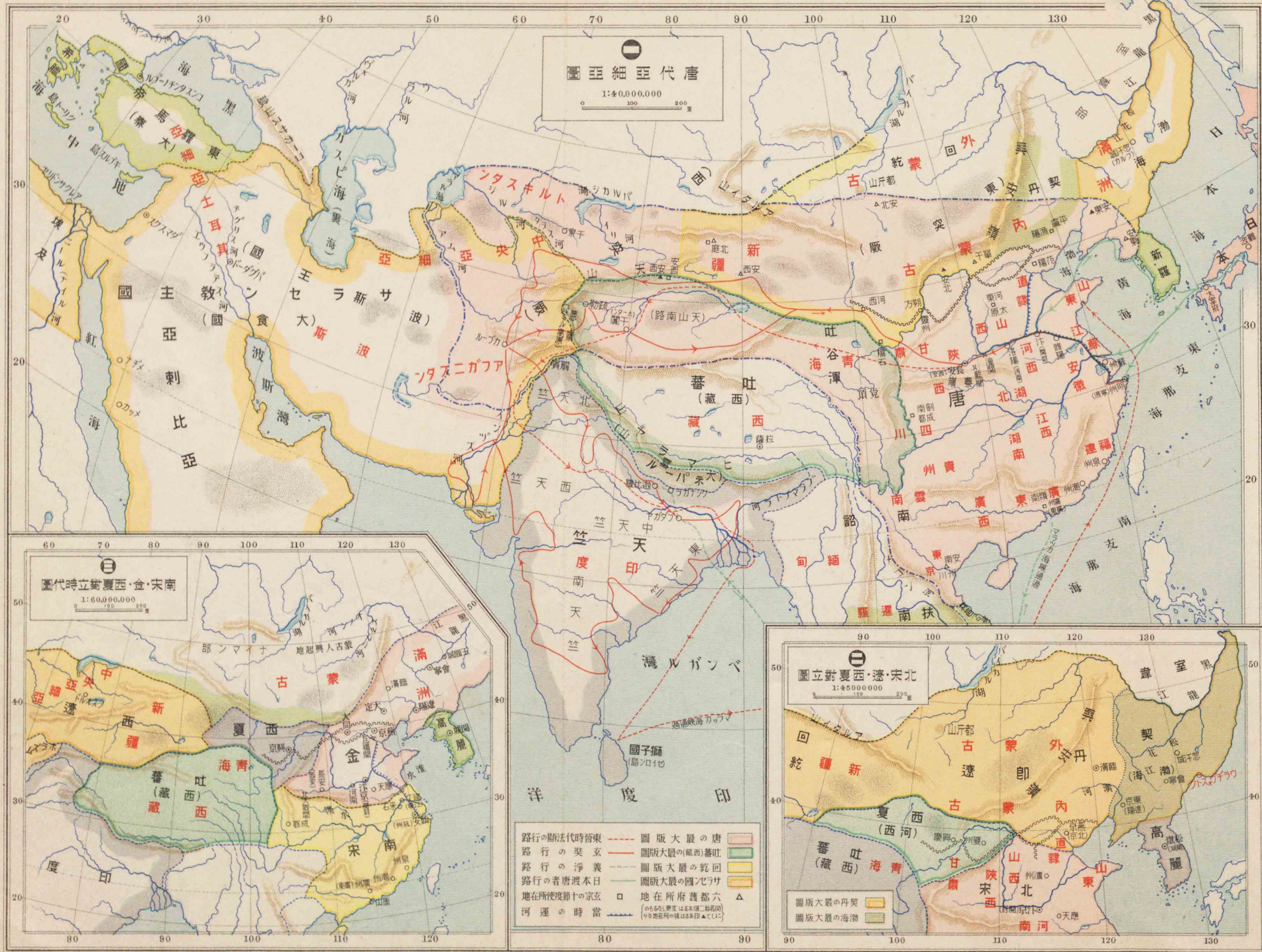
圖三第



- 路行の時代時管東 --- 圖版大最の唐
 路行の契玄 --- 圖版大最の(藏西)蕃吐
 路行の淨義 --- 圖版大最の乾回
 路行の著唐渡本日 --- 圖版大最の國シフサ
 地在所使度節十の宗玄 □ 地在所府護都六 △
 河運の時當 --- (の北北、東東は北東二點名同)
 (の北北、東東は北東二點名同)



圖三第



圖四第



圖五第



圖五第



圖六第





昭和十二年七月二十日
 昭和十二年七月二十日
 昭和十二年七月二十日
 昭和十二年七月二十日
 昭和十四年十一月五日
 修正三版發行
 修正三版發行
 修正三版發行
 修正三版發行

中等
 新編
 東洋史
 定價金九十錢

新中山東洋

著者 中山久四郎

東京市神田區神保町一丁目一番地

發行者 三省堂

代表者 龜井豐治

印刷者 三省堂蒲田工場

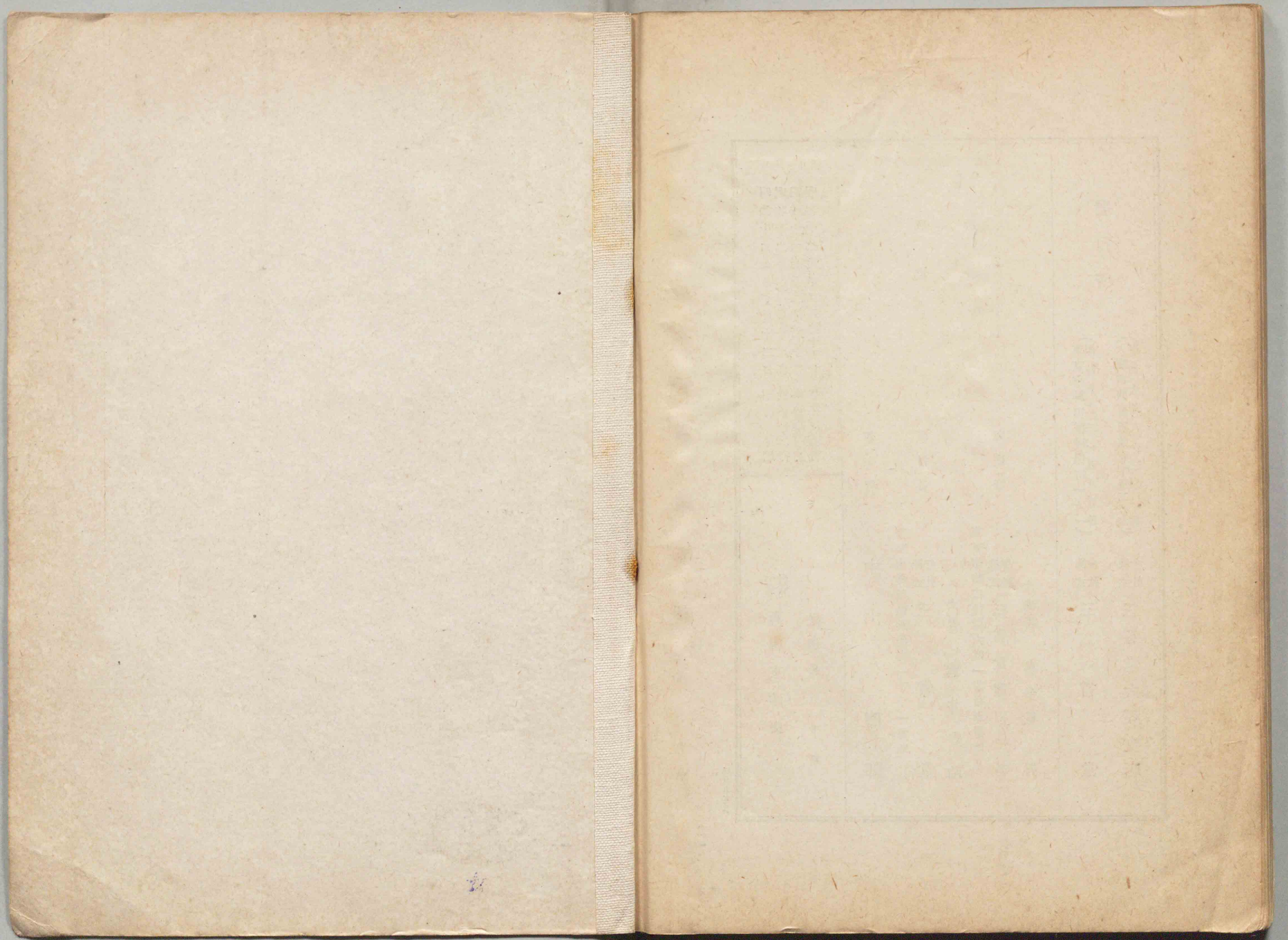
代表者 喜多見昇

版權所有

發行所

(東京市神田區神保町一丁目五番一) 株式會社 三省堂

(大阪市西區阿波座下通一丁目六番) 株式會社 三省堂大阪支店



修中二三
清

広島大学図書

2000063596



庫
9
96

